歩くご都合主義

にえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
歩くご都合主義

【Ｎコード】
Ｎ００３０Ｏ

【作者名】
にえる

【あらすじ】
・ネギまの世界
・男の娘
・俺
の３点セットな話

こんにちは、せかい（前書き）

おはよう

から

おやすみ

まで

ゆっくりしていってね！！！

こんにちは、せかい

俺は影が薄かった。
産まれたばかりは普通だったらしいのだが歳を重ねる毎に薄くなった。

写真に写っていようが、ビデオで撮影しようが気づかれない。
自動ドアも開かない。
人と話すこともできないので友達もいない。
などと挙げれば切りがない。

ある日のことだ。
狭いが見通しの良い道路の真ん中を歩いていた。
そしたら轢かれた。
しかも車は気付かずに走り去った。
轢き逃げだ。

幸いなことに通行人もいる。
救急車を呼んでくれれば生きられるかもしれない。
が、誰も俺に気づくことは無かった。
徐々に増す痛みを堪えていると意識が薄れていった。
そこで生前の記憶は途切れている。

死語でも俺は悲惨だという自信があった。
死んでも影が薄いままだったからだ。

気づくと魂を輪廻の輪に入れる場所にいた。
後から神様とやらに聞いたから間違いない。

俺の番が回ってくるかと思いきや、無視。
気が遠くなるほど待ったが俺の番は無し。

そんなある日（？）、凄く偉い人っぽいのがきた。
魂を処理してるのが白っぽい何かだが、その偉い人っぽいのはキラキラだったのだ。

そのキラキラは俺に気付いたのだが問題はそこからだった。
俺は輪廻転生できないらしい。

「おまえは存在が薄すぎて順番が飛ばされ、用意されていた転生先が埋まってしまった　他にもズレて影響が出ている」

「なん、だと……！？」

「おまえの転生先は無い」

「なにそれこわい」

「準備期間を設ける　その間は別の世界に行ってこい　ご都合主義ってやつだ」

※神様とのほのぼの・一部抜粋

「それからこの世界に来て一ヶ月って感じだった」

目の前でチャーハンをはぐはぐしている少女、ではなくて男の娘に話す。
名前は雨音（アマネ）　那由多（ナユタ）。
日の光で輝く白に近い銀髪は背中が隠れるほど長く、ルビーのような透明感のある紅い瞳、雪のように真っ白の肌とアルビノを彷彿させる。
人形のようにかなり整った顔だが人間味を帯びており、それが少女のように見せる。
俺よりも背は低く、１６０くらいだろうか。
美しいを体現していると言える。
男なんだが。

「えっと、冗談とか」

「ねぇよ」

爽やかな笑顔でグラスに注いだ水を渡す。
那由多は困った顔をしたまま水を飲み干した。

「那由多、でいいか？」

「あ、うん」

「お前も面白いよな　不老なのに食べ物が魚ばかりで心が折れて餓死しかけるとか」

那由多はチャーハンを作っていると現れたのだが、色々と凄かった。
服はボロボロだったが、本人は綺麗なままだった。
まぁ、頬が痩けていたり、ヨダレが垂れていたりと微妙だったが。
俺に気付いて会話ができる不思議生物だった。

「サバイバルの知識は持ってないし、1年も生きてたんだから褒めて欲しいくらいだよ」

あはー、とばかりに頬を緩めながら笑った。
チャーハンを食べ終わって満足したのかニコニコしている。

「1年か……頑張ったんだな」

「や、やめて……微笑ましそうに撫でないでっ！！　ナデポはダメっ！！」

那由多の頭を撫でると毎回同じ反応するのだ。
顔を真っ赤にて口では文句を言いつつも逃げずにいる。
ちょっと面白いので癖になる。

「ところで何年ここにいるつもりなんだ？」

疑問に思ったので聞いてみる。
那由多が口をモゴモゴさせていたが諦めたように言った。
「……あと５０年くらいかなぁ」
……１年であれだろ。
こいつ、死ぬつもりだったのか。
それとも仙人とか目指したか。

「なんだドＭか」
「いや、違うからね？　原作の始めのほうに関わろうとしただけだよ」
「それでも半世紀は無いだろ」
「修行期間だってば」
「成果は？」
「あはー……」
俺と視線を合わせようとしない。
考え無しだったんだな、と内心で呟く。

「原作といえばここはなんの漫画、もしくはアニメなんだ？」

俺の疑問に驚いた那由多が目を見開く。

上向いて唾を吐いたら自分にかかるのなんて当たり前、みたいな感じだ。

「え、知らないの？」

「適当に流して転生するつもりだからな」

不老とか那由多のやる気を削いで申し訳ないのだが俺はダルい。

第一の人生で無視され続けた俺は第二の人生は流されると決めたのだ。

影の薄さは神様との会話から俺の特性が変質したらしい。

練習しているが存在の濃さを変えるくらいしかできない。

そして野生の動物に襲われないように薄くしていた俺に話しかけた那由多の異常が際立つ。

「それに知っててもやりたいことが無いしな」

「そう……」

原作に介入するつもりの那由多は不老。
対して俺は死ぬ前のまま。
チートスペックだが原作云々の前に俺は寿命で死ぬだろう。
寂しそうに笑う那由多を見ながら何も思わないわけではないが、仕方ないこともある。

この世界に興味は無いが殺伐とした世紀末みたいな世界だったら流石に同郷の那由多が心配になる。
１年を過ごして死にかけた彼が耐えられる気がしない。

「えっと、ネギまって知ってる？　子供先生が出る漫画なんだけど」

「なんだ、赤松ワールドか　俺はもっとゾンビとか身分差別が蔓延ってる世界とかかと　修行的に」

「いや、目に見えるガッカリ具合をアピールされても困るから」

心配して損をしたのだが聞いてみると転生先を選べたのだとか。
流石に暗い世界は嫌だったのでネギまらしい。
赤松ワールドは結局、主人公の周りの出来事は「敵は良い奴だった！！」「全員助かります！！」「ハッピーエンド！！」な世界だから大丈夫だろう。
主人公のモテ方は異常だが。

「まぁ、いいか　ネギまは普通に読んだ程度だが原作は……２０００年くらいか」

那由多は予定の５０年前から修行して強くなる予定であり、今は１９００年代の中頃だろうか。
俺も原作を冷やかせるかもなぁ、などと那由多に笑いかけるも首を

横に振られる。
「今は１２、１３世紀くらいだから無理じゃないかな、冷やかし」
「え」
「今は１３００年前後だよ」
こいつ、あと７００年何するつもりだし。
俺も何すればいいんだし。
考え無し怖い。
あ、俺もか。
「僕には目的があってね　修行期間は余計だったけど」
「森の精霊か　やめておけ、人間には無理だ」
「いや、精霊を目指すなら最初から神様に頼むってば」
「そーなのかー」
那由多の目的は皆大好きエヴァンジェリンにフラグ立てることらしい。
「悪の魔法使いだ！！」は６００年くらい前に真祖化するからその時を狙ってるのだとか。
？「アタイったらサイキョーね」と出会うためとはいえ、無茶をするヤツだ。
「そんなこと話して俺がエヴァンジェリンを狙ってたらどうするんだよ」

「狙ってるの？」

「いいや、その頃には爺だし　だが俺も狙ってたら抜け駆けされてたかもわからんぞ？」

「あはー……」

「大丈夫かよ……」

久しぶりに人と話せて嬉しいのはわかるがばか正直すぎる。
原作は戦争もあるし、大丈夫だろうか。
凄い心配なんだが。

「で、場所は？」

「え？」

「エヴァンジェリンの住んでる場所だ　近くにいればすぐに接触できるだろ　この森の付近か？」

「いや、知らないんだよね」

「え？」

能力や外見、年代に神様のチートを使ったので場所は適当だったら

しい。
ヤバいな、ここどこの森だし。
エヴァンジェリンの話からヨーロッパのどこかだと思ったが違うかもしれん。
植生とかわからん俺にはさっぱりだ。

「考えはあるよ」

薄い胸を張って自信有り気に言った。
髪の毛がさらさらと流れる。
長すぎて邪魔にならないのだろうか。

「オリ主はご都合主義の特典が付いてるって神様が言ってたからね」

考えじゃなかった。
運に身を任せて心が折れてたのにこの自信。
那由多が生きていけるか本当に心配になってきた。

「……那由多はオリ主か？」

「神様が言ってたよ」

「俺は？」

「あはー……」

俺はオリ主である那由多に引き寄せられたのでは無かろうか。
この世界に来るときに神様がご都合主義と言っていた。
つまり那由多のご都合主義に巻き込まれた形かもしれない。

那由多の修行期間、もしくはエヴァンジェリンとの接触までの空白期を俺で埋める、とか。
うわ、有り得そうだ。

「どうしたの？」

チャーハンの米粒を頬に付けたまま首を傾げる那由多を見ていると、それもいいかと思う。
手間の懸かる弟（妹？）っぽいし。

「いいや、何でもない　ほら、付いてるぞ」

米粒をとって食べる。
そういえば俺の朝飯だったんだよな、これ。

「こんな、古典的な……いや、僕は男だから　オリ主だから」

顔を真っ赤にして俯いた那由多が呟いている。
転生も満更ではないような気がしてきた。
面白いし、オリ主だし。
退屈は無いだろう。

「まあ、俺の寿命までよろしくな　ちなみに名前は枯葉（カレハ）　柚希（ユズキ）だ」

「えっと、よろしくお願いします　……カレハさん？」

「柚希でいいぞ」

「よろしくね　ゆ、柚希？」

まだ固いのだがそのうち慣れるだろう。
恥ずかしそうにしている那由多の頭を撫でる。
髪の毛がぐしゃぐしゃに、ナデポはダメ、とか言ってるが無視する。

「ちなみに俺のチャーハンは『壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）』ができる」

「……え？」

那由多は固まった。

こんにちは、せかい（後書き）

今回のまとめ

・チャーハン
・男の娘
・原作まで７００年

はじめまして、おともだち（前書き）

おはよう

から

おやすみ

まで

ゆっくりしていってね！！！

はじめまして、おともだち

神様にネギまの世界に来訪させてもらった。
話によると順番が乱れて生じた埋め合わせを僕でしたらしい。
ご都合主義だよね。

「まあ、チート能力を貰ってる僕も言えた身分じゃないけどね」

来訪する代わりに特殊技能をいくつか貰った。

まず、不老。
これが無いと最近の世界観に付いていけない。

次に才能。
チートオリ主の必須だろう。
戦闘面のみの能力という条件だった。
他の面に適用する場合はまた別の才能が必要ということだ。

そして異世界の技術の修得だ。
この世界とは別の世界の能力を得ることができる。
修行は必要だがこの世界に規格を合わせた状態で修得できるらしい。
今は修行中だからわからないのだが。

エヴァンジェリン誕生の５０年くらい前に来訪させてもらった。

ネギまといったら彼女だ、というエヴァに会うためだ。
５０年は準備期間だ。
それから1年が過ぎたのだが。

「５０年は長すぎたかな……」

後悔していた。
独りでは寂しく、やることも無い。
当初は才能に有頂天だったが今は身体能力を鍛えることしか出来ない。

魔力は腐るほどある。
だが魔法を知らない。
流れを操る程度だ。

気だって膨大だ。
身体能力が高過ぎて使い道が無い。
武術を修得したかったが基礎が無いので伸ばせないのだ。

だから、最近はずっと正拳突きをしている。
一日中、会長並みの正拳突き。
感謝する対象は無く、正拳突きの間は空虚だった。
神様に感謝する気は湧かない。
自然に感謝するのもやめた。
食べ物に感謝しようかとも思ったが最近は食べていない。

「思いつきって良くないね……」

初めは川で捕まえた魚を焼いて食べるか木の実を食べるくらいだった。
動物を捕まえても知識が無いので捌けない。
ここ一月ほど食べていない。
生きていられるのは膨大な魔力か気のおかげだろうか。

不老だが不死では無い。
餓死とか笑えないので食べようと思うが来訪前を思い出すと涙が出そうになり喉を通らない。
やはり辛い。

正拳突きをしている場所は来訪して立っていた森の中にある花畑だ。
場所は神様が適当に送ったのでわからない。

そんな生活だから町や村などには行ったことがない。
歩いても、歩いても森ばかりで諦めてしまった。

「はぁ……」

溜め息が増えた。
暇で寂しいだなんて生きるのが辛い。
原作に交わらずに自殺しようかな……。

「ダメだ、思考が危ない方向に進むなぁ……」

頭を左右に振って思い直す。
日も暮れてきた。
とりあえず早く横になることにした。

草木に埋もれて今日も眠る。
ベッドを懐かしむことが無くなった。

独りで夜空を眺める時間も伸びた。
家族と会いたい気持ちは残っていない。

風のざわめきが聴こえてくる。
日本での生活を思い出せなくなってきた。

微睡む意識で思う。
そんなのはどうでもいいけど寂しいなぁ、と。

そして、来訪前に食べた食事の夢を見た。

「おなか、すいたなぁ……」

朝、飛び起きた。
香ばしい醤油が焼ける匂い。
そんなに離れていない位置からだと鋭敏になった感覚が訴える。

さっきから自己主張を繰り返すお腹を擦りながら匂いの元へ向かう。
空腹で力が出なかったため少し時間がかかってしまったが目的地に着いた。

そして僕が目にしたのは――

チャーハン作るよ！！

,＜,,＜
（;、・ω・）　。・。・（ ）
／　o┣、ニニフ）
しー―Ｊ

エプロン姿でチャーハンを作っている青年だった。
しかもキッチンで。
森の中にキッチン……。

空腹の極限状態での幻覚だろうか。
僕の視線に気付いたのか青年は驚いたようだったが中華鍋をコンロに置いて話しかけてきた。

「俺のことがわかるのか？」

「……ん？」

「言葉はわかるか？」

コクコクと頷く。
彼は日本語を話していた。
正直、話すのも億劫だった。

僕の返事に彼は嬉しそうに笑った。
そしてチャーハンを皿に盛りながら一言。

「ヨダレが垂れてるよ、嬢ちゃん」

忘れていたが神様に容姿を女の子っぽくしてもらったのだ。
慌てて服の袖で拭う。

そういえば服も来訪時から同じ物だ。
一応、洗ってはいるがボロボロだった。

急に恥ずかしくなって顔に血液が集まるのがわかる。
彼は僕にチャーハンが盛ってある皿を差し出した。

「まあ、何かの縁だ　食ってくれ」

彼は微笑んだ。

「あ、あの……いただきます……」

ドキリとした。
あれ？
ニコポされたんじゃないのかな、これ。

バカなことを考えながらチャーハンを食べる。

あ、美味しい。

この日から正拳突きに感謝を込めるようになった。

はじめまして、おともだち（後書き）

今回のまとめ

・那由多は腹ペコ
・柚希のチャーハン
・感謝する対象ができたよ！！！

これが、とくぎです（前書き）

現在の状況

――任務――

那由多が死なずにエヴァンジェリンと接触する

――期間――

柚希の寿命が続く限り

――報酬――

達成感

安心感

これが、とくぎです

那由多は俺が神様に貰った能力が気になるらしいのだ。
秘密にする気も無いので教えてやることにする。

「主に投影が使える」

「投影って宝具とか出すやつでしょ？　アーチャーの能力だよね」

「似たようなモノだけど俺のはアーチャーと比べると（ノ∀、）アチャーだ」

「あ、あちゃー？」

「（ノ∀、）アチャー」

「あ、あちゃー」

「（ノ∀、）アチャー」

面倒なので要点だけ説明すると

・脳内に現代のあらゆる物品カタログがある
・魔力を使ってカタログから投影
・揺りかごから墓まで幅広い品物
・無料
・生活面で無敵

「えっと、
戦闘に使ったりとか……」

「現代兵器もあるが使用法を知らないからな　使えて包丁かナイフだ」

「銃とかも……」

「あるけど俺が使えないから投げつけて壊れた幻想するしかない」

「チャーハンとかは……」

「心配するな　食べ物は食べたら爆発できない」

「……食べたら？」

「食べる前ならボンッだ」

青くなる那由多をニヤニヤしながら見る。

爆弾を食べてたようなものだからな。

「あとはテンプレのモノを適当に神様が選んだ　たぶん、気と魔力や身体能力じゃねぇの」

「多分て適当だなぁ……」

「その位がちょうどいいんだよ　精神力の向上もやったし　那由多は色々と考えてたみたいだけど……」

上手くいったか？
そういった意味を込めてチラリと目を向けると空を仰いでいた。
わかりやすいヤツだ。

「俺の投影はチャーハンで見ただろうけど……」

那由多を見る。
頭の先から爪先まで。
服と髪を結える紐、靴ってところか。

「服だな、服　投影するから好みを言え」

「えっと、服も投影できるの？」

「当たり前だ　無限の日常を甘くみるなよ」

「ちょっとニートっぽいと思った」

必殺技の名前が『ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｎｅｅｔ　ｌｉｆｅ』になった。

使う機会があるかはわからん。
というか俺は生きている間に戦闘するのだろうか。
「じゃあ……ゴスロリとかできる？」
「できるが……」
どこに向かってるんだろうか、こいつ。
いっそのことＴＳして百合に走れば良かったんじゃね。
言わないけどさ。
「黒系がいいかなぁ」
黒か。
コスプレの中に確かバリアジャケットがあったな。
「フェイトそんとかどうよ　簡単に痴女になれる」
「却下」
凄い笑顔だった。
まあ、凄まじい露出で暮らすわけにもいかないだろう。
俺も嫌だ。
ですよねーなんて言いながら魔力に戻そうかとも思ったが遠くに投げて爆発させてみる。
広場が出来てしまった。

「……着たら危なくない？」

「爆発しないように俺の魔力と切り離すから大丈夫だ　半永久的に残るし魔力防御もばっちり」

「……ホント？」

「さっきの爆発は茶目っ気だから許せ」

涙目で震える那由多を見て、冗談が過ぎたなと反省する。
友好的な相手に爆発する服を着せるわけがない。
なんの友愛だし。

下がった友好度を取り戻すために真面目に、半分はふざけて取り組む。
正直、ゴスロリを要求されても困る。
俺は学ランだし。

「おー、いい感じだよ」

どうやらお気に召したらしい。
毎回ちょっぴりえっちなハプニングが起きる漫画のヤミさんの衣装を投影。
俺の趣味です。
那由多が着ると目の保養になる。

男なのが残念だ。
髪留めから靴まで揃えたのだ。
下着とかの話は流そう。
ほら、なんか禁がかかりそうだし。

「準備もできたし、どうするか　地名を知りたいところだが」

「あ、じゃあ人を捜そうよ　森を出ようと思ったんだけど迷ってずっと一人だったんだよね」

本当に大丈夫だろうか。
俺が死んだ後とか心配で堪らない。
俺の寿命が無くなる前にエヴァンジェリンを見つけないと那由多が野垂れ死にそうだ。

「とりあえず、川を歩くか」

「え、森を適当に散策しないの？」

「……川沿いに進めば人の痕跡が見つかるかもしれないだろ」

「適当だなぁ」

「太陽の位置すら確認しない那由多よりはマシだ　ヒトは目印無しだと一定の距離でグルグルと回りながら同じ場所を歩くらしい　鳥よりもバカだよな、修行してるのに」

「あはー……」

ｏｒｚな那由多を後にして川沿いをひたすら歩く。
すぐに付いてきたが立ち直れていない那由多はフラフラとしている。
２Ｐカラーのヤミは弱っているようだ。

「エヴァの話なんだけど」

「ん？」

少しして立ち直った那由多が呟いた。

「いつアルビレオと会ったのかなって」

クウネルがキティと呼んでいたことか。
プライドばりばりの幼女だし自分から名乗ることは無いだろう。
吸血鬼になって間もない頃かもしれんな。

「むしろ俺はあいつの年齢が知りたい」

「……僕も気になる」

下手したらエヴァンジェリン並みか。
魔法使いって長寿だな。
寿命すらもバグとかこれだから漫画のキャラは。

那由多は魔法を使えないらしい。
魔法世界に行くかどうにかして習うのだろう。
魔法のある世界で使わない俺って勿体無い。

「あー、魔法使ってみたかったな」

「エヴァが知ってるかもしれないよ」

「すぐに見つかっても５０歳だから修行するには遅すぎる」

「学園長くらい長く生きれば……」

「あいつ妖怪じゃん　人間の俺には無理だ」

「いや、人間だからね　ぬらりひょんとかじゃないよ」

「なん、だと……？」

俺の呟きから衝撃の事実が発覚した。
学園長は妖怪では無いのだ。
上層部が妖怪に乗っ取られているのを取り返す、みたいなのが子供先生の未来だと思ったが違うらしい。

「知識とか大丈夫？」

「ダメでも構わんだろ　エヴァンジェリンを見れるかどうかって線だし　アルビレオを発見して師事できたら寿命が伸びるかもな」

「そうだよね、頑張ってアルビレオ・イマを捜そうね？」

「目的が変わってんじゃねぇか」

突然、わけわからんことを言い出した那由多にデコピンを打ち込む。
チートスペックの一撃は強力らしく那由多が吹き飛んだ。
涙目になり額を抑えながら戻ってきた。

「ゆ、ゆ、ゆずきぃが生きてる間に見付からなかったら寂しいし寿命を伸びれば……」

「誰だよゆずきぃって……　まあ、５０年くらいは旅して魔法使いを捜したり修行したりだな」

「そうなるかな」

「その後はエヴァンジェリンの捜索だが」

今の時代って原作に出てくる拳法が成立しているのだろうか。
原型や亜種は沢山あるだろうが。
武術は後回しか我流に頼るかもしれん。

「あっ」

「どうした」

「エヴァに使徒化させてもらえば？」

「早くても５０歳だぞ　ヨボヨボで生き永らえたく無いな」

「あはー……じゃあなるべく早く見つけないと　僕もヨボヨボの柚希を見たくないからね」

「好きでヨボヨボになるわけじゃねぇからな」

寿命を伸ばす方向で目的が進んでいるらしい。
魔力や気がチートだから結構長生きする気もするんだが。
那由多は何が嬉しいのかニコニコしたままだ。
２Ｐカラーのヤミがニコニコ……可愛いがなんとも言えない気分になる。

「こんなにアルビレオを見つけたいと思わなかったよ」

「なんだ、恋か」

「違うからね　魔法を使えるから会いたいだけだってば」

「利用するためとは……悪だな」

「違うってば」

冗談だと笑いながら乱暴に頭を撫でる。
だからナデポはダメっ！！とか叫ぶが無視。
笑っているので満更でも無いのだろう。

「とりあえず、現在地だけでも知っておきたい　エヴァンジェリン

を捜しようがないからな」

「時期がくれば大丈夫じゃないかな」

多分、大丈夫じゃないと思う。
ご都合主義で現れたのが俺とか完璧に運が足りてない。
普通は凄い魔法使いか拳法家が現れるところを俺が出現とか無いわ。
確実に俺から見ても運が無い。

「……那由多の場合はこっちから捜さないとダメだな」

「ねぇ、視線を合わせてよ」

「可哀想で見てられねぇし」

「何があったの！？」

「不憫」

苦労するオリ主とみた。
フラグ立てすぎて苦労するか他のオリ主とブッキングするかはわからんが。
原作は百合っぽいヤツもいそうだから襲われるかもしれない。

「ま、頑張れ」

「撫でないでっ！！　ナデポがっ……ナデポがっ……」

下手したら不老不死の他のオリ主と対立したり、惚れられたりするかもな。

永い刻の追っかけ……悪夢（笑）だな。
見られないのが残念だ。
叫ぶ那由多の頭を撫でながら考える。

そういえば戦争とかいつ始まるのだろうか。

カレンダーが無いので不便だ。

これが、とくぎです（後書き）

今回のまとめ

・投影
・２Ｐカラーのヤミ
・オリ主（笑）並みの運

かくほ、とどまるばしょ（前書き）

魔法使いにエアガンとか効かないだろうか

※柚希の呟き語録から抜粋

かくほ、とどまるばしょ

――カタログを展開――

――対象を検索――

――好みに合った物にチェック――

――気になるページにドッグイヤー――

――必要魔力の値を確認――

――自身の魔力を確認――

――魔力の支払――

――行使完了――

――『無限の日常（アンリミテッド・ニート・ライフ）』――

「という手順を踏んで俺たちの日用品になる」

「あ、はい　いただきます」

「よく噛めよ」

「んー」

今日も今日とて森で食事。
椅子に腰掛け、机の上に用意した料理を食べる。
全部俺の魔力なんだが。
神様の恩恵により俺が食べても腹が膨れるし、栄養にもなる。
他人が食べると魔力の回復が早くなるのでポーションもどきとしても活躍するかもしれない。

「つまり、俺の一部が那由多に吸収される」

「……っ！？」

「冗談だ」

何故か吹き出しそうになってる那由多に水を渡す。
強ち、冗談でも無い。
完璧な食物だが俺の魔力の塊という面もある。

「けほっ……　変な事を言い出すのはやめてよね」

「何と無くだ　だが、俺の魔力の塊だから本当の事でもある」

「言い方が悪いんだよ！！」

機嫌を損ねたらしいが、すぐに料理をはぐはぐ食べる。
餌付けしている気分になる。
このまま俺の投影に依存したらマズイ気がする。
原作までの不便さ的に考えて。

俺も不便になるから自重しないけど。

「さて、この先どうするかの話だが」

先日、街を見つけた。
そこで情報収集を行った、那由多が。
俺は未だに薄い、凄く薄い、いないくらいの調整しか出来なかったので隣で見守るくらいだった。

物取りや誘拐、変質者などの那由多狙いは殴ったので生きてるかわからない。
盗賊はチャーハン爆撃（チャーハンの壊れた幻想）で追い払った。
トリモチをおまけしておいたのできっと彼らの隠れ家は凄まじいだろう、爆発的な意味で。

「魔法使いを捜そうよ」

「まずは方法を俺に教えてみろ」

「……街を散策？」

「一人で行け」

「ごめんなさい」

街は凄く臭かった。

家畜小屋を超える異臭が漂っている。
住人の話からヨーロッパのどこかだと判明したのですぐに臭いがしない森に戻っていた。
汚すぎていられない。

「多分、滞在するだろうから捜すなら街だと思うんだけどね」

「諦めて修行しろ」

ぺしり、と額を叩く。
うーうーと唸る那由多を無視して予定を立てる。
といっても特に無い。
那由多の修行をサポートくらいか。

拠点は那由多がチャーハンを食べた場所。
フェイトそんのバリアジャケット事件でだだっ広い地面が拡がっていて丁度良いのだ。
そこにログハウスを投影して完成。
俺に限界は無い。
那由多が何かを悟っていた。

「……感謝してくるからね」

「はいはい、頑張れ」

那由多の日課である感謝パンチを椅子に座って眺める。

ログハウスの中で食事をしていたのだが感謝パンチを眺めるために朝と昼は外で摂る。

音を置き去りとかそういうレベルでは無い正拳突きにより発生する衝撃波の対処をしていた。

適当に投影して爆発させるだけだが刹那的にできるようになった。

ヒトの気配を感じたら爆撃してトリモチをくっつける。

掃除は大事だと思う。

那由多は会長のように観音様だか仏様を出せるらしい。

闘気や覇気などと呼ばれる達人が出す凄みが正体らしい。

全力全壊でどこか別の場所へ向かっているのではないだろうか。

「やっぱり魔法使いと会いたいんだよね　ネギまにいるんだしさ」

感謝を終えた那由多がそんな言葉とともに戻ってきた。

オリ主なら数日以内に行き倒れの魔法使いを拾える出来事が起きるだろう。

普通……というのがあるかはわからんがオリ主の常識だ。

「やっぱり捜したほうがいいと思うんだよね」

多分、修行に飽きたんだろう。

本当にコイツはオリ主かと疑ってしまう。

そう、この気持ちを言葉にすると……

「那由多クオリティ（笑）」

「なんかイラッとしたんだけど」

「あまり手懸かりの無い旅をしたくないな　エヴァンジェリンの件はヨーロッパだから何とかする気にはなったが魔法使いはサッパリだ」

「あれ、流しちゃう感じなの？」

「魔法使いも不衛生な場所にいたくないと思う　外に垂れ流しって事件だろ」

「柚希クオリティ（笑）」

「真面目にやろうぜ」

「あ、はい」

本音を言えば那由多の感謝パンチ中に森の住人（妖精では無い）を焼き払って静かな拠点を手に入れたのに態々移動したくないだけだ。旅をするのは構わないが安全圏を作るのは面倒なのだ。襲われても問題無いのかもしれないが。

「でもエヴァが誕生するまでの５０年くらい旅するって話だったよね」

「いいか、那由多　大人は卑怯なんだ」
「多分、歳は変わらないと思うけど」
「いいか、那由多　俺が日用品を用意してるんだ」
「え、うん……そうだね」
ログハウスを指差して言う。
那由多が頷いたのを見てから口を開く。
「言うこと聞いておけって　爆発する前に」
「自然に脅してきたね……」
「語尾に爆発したを付けるのが一時期流行ったけど」
「那由多が爆発した、とか洒落にならないからね！？」
涙目でふるふるする那由多。
弄り倒したくなるのは何故だろう。
「仕方ないな……」
「じゃあっ」
「一年経ったらな」
那由多がｏｒｚした。

凄く、似合う。
エヴァンジェリンにイジメられないか心配になってきた。

とりあえず、この一年で最低限の生きる知識を教えようかと思う。
チートスペックのクセに生活能力は現代っ子はヤバい。

俺は影が薄かったのでなんでも出来ないと死ぬ可能性があった。
バスに乗って何処かに向かう行事は置いていていかれるので死活問題。
旅行に行けば旅先か途中の休憩場所に放置。
冬の北海道は死ねる。

「柚希、ボーッとしてどうしたの？」

「カタログを見てた　3日おきくらいの頻度で更新されるからな」

「電波受信みたいな？」

「だいたい合ってるが印象が悪いからやめてくれないか」

毒電波受信したらどうするんだ。
カタログがバグるとか怖い。
ポケモンのバグ技みたいにグリーンバッジとか出てくるみたいに那由多とか選択可能になったらヤバい。
あと、ぎえピー！！と叫ぶピッピはバグだと思う。

「何か新しい物とかあった？」

「ん、ああ　パソコンとか冷蔵庫といった電化製品が多いな」

「電気ないのにね」

「発電機があるけど動かすために色々投影するから却下　ソーラーパネルでも付けるか」

「今って中世だよね……」

「そうだな」

夜はキャンプ用のライトに電池を入れて使っている。
虫が寄って来ないタイプは便利でありがたい。
那由多が何故か凹んでいたので慰める。
ナデポはダメ、堕ちちゃう！！と騒がしかった。

「珍しいのは空飛ぶ円盤だな」

「ＵＦＯ！？」

「複製品でペンタゴン製だ　動かないジャンク品に近いっぽい」

「ペンタゴン！？」

「オリジナルの広告があるから次の更新で入荷できる」

「ごめんね、柚希　僕には着いていけないみたい」

那由多の目からハイライトが消えていた。
少しグッときたが自制してカタログを眺める。
必要魔力が滅茶苦茶多い、多すぎる。
乗り物はどれも馬鹿みたいに魔力が多いが空飛ぶ円盤は伊達じゃなかった。
生産地は……文字化けしていて上手く言語化できてない。
どっかの惑星だろう。

「僕も宇宙人がいるって信じてたんだよね　こんな風に知るとは思わなかったけど……」

那由多が壊れたかもしれない。
ブツブツ部屋の隅で呟いている。

「ナデポはダメ、ダメだって！！　ダメぇ、安心しちゃうよ……」

頭を撫でると、あら不思議。
何時もの調子を取り戻したようだ。
那由多の笑顔は目の保養になる。
そのうちカメラを投影しよう。

あっという間と言えるかは微妙だが一年が過ぎた。
那由多に動物の捌き方を教えたり、料理を教えたりして過ごした。
もちろん那由多で遊んだり、那由多を撫でたりも忘れなかった。
ＵＦＯは凄かったとだけ伝えておく。

「家は残しておくの？」

「お前がエヴァンジェリンと放浪するときに拠点として使えるからな　俺はわからんが」

「……変なのが住み着いたりして危ないかも」

「影を薄くしておくから大丈夫だ」

「今サラッと凄い事を言ったよね」

「ほら、行くぞ」

「あ、ナデポはダメだって……」

面倒になってきたので頭を撫でて黙らせる。
那由多は撫でられるのが弱点らしい。
変になってしまうとか。
うーうー唸っていて詳しく教えてくれない。

「じゃ、いってきます」

「あ、待って……いってきます」

住み慣れたログハウスを後にした。

何時か戻って来ると心に決めて……！！

なんか死亡フラグっぽくなった。

幾つか小競り合いが起きて国の関係が拗れているとか。

戦争とか始まるのかもしれない。

その後、彼らは――戦地を渡り歩いた英雄――として語り継がれる。

とかになったら死ねる。
那由多と俺のオリ主レベル次第で面倒さがかなり変化するはず。
オリ主（笑）……原作まで修行して過ごす。精神力がハンパない。
オリ主……事件が勝手に舞い込む。賞金首からヒーローまで多種多様。二つ名のルビがかっこいい。

あー、うん。
がんばれ、なゆた。
まじがんばれ。

かくほ、とどまるばしょ（後書き）

今回のまとめ

・ヨーロッパ
・那由多クオリティ（笑）
・ＵＦＯ

NG集　01（前書き）

『カタログ』

赤い弓兵の丘みたいなモノ。

商品の詳しい情報が載っているので暇潰しに読むのも面白い。

必要魔力とは別に余剰魔力を加えることで物品を強化できる。

那由多は強化された果物が好き。

見事なまでに餌付けされている。

３日おきに更新される。

更新時に配布される広告により次の品物を確認しておける。

柚希が生きていたであろう世界の品々がカタログに載っている。

探せばＵＦＯや臓器、危ない薬、ヒトも見つかる。

違法な手段の物品もカタログ内に垂れ流し状態。

結構ブラックな能力である。

最近は生物兵器も入荷。

NG集　01

「ちょっと人工衛星を設置してくる」

「あんまり遅くならないでね」

「夕飯までには帰ってくるから」

「ん、お風呂用意沸かして待ってるから」

話題にも出ていたが風呂の水は汲み上げ式の人力ポンプで地下水を吸い上げている。
この仕事は入浴剤を要求する那由多に任せている。
投影してもいいが、楽しすぎるのは那由多の為にならない。

思考が逸れたが那由多に見送られた後、宇宙を目指す。
無理して作っただけあってＵＦＯは素晴らしい精度を誇る。
凄く、速いです。

カタログからマニュアルを投影したのでＵＦＯも辿々しく扱っている。
近代兵器のマニュアルもあるので最強オリ主の仲間入りかもしれない。
でも原作のキャラは雷になったり山を間違って粉砕したりと規格外だからな。
やはりダメかもしれないな。

人工衛星を三つ投下。
適当に放った為に内一つが地球に落下していった。

那由多が受け止めてくれることを期待しながら目を逸らした。
摩擦で燃えながらも形を残して落下する人工衛星を見ながら魔力製品の丈夫さを改めて知る。

他の二つは元気に地球の周りを回ってくれている。
落下中の人工衛星を爆発させれば安全じゃないかと気づいた。
遅いかもしれないが爆発させる。

フランスとイギリスの原型っぽい国の関係が緊張状態に入ったらしい。
小競り合いが度々行われて、近い内に大きな戦争が起きる可能性があるとか。
原因は国境付近で爆発が起きたらしい。
両国が相手が侵攻を始めたと主張しているとか。

偶然見かけた人の話だと空から物体が降ってきたらしい。
そしてすぐ後に爆発が起きたとか。

……やっちゃったぜ。

NG集　01（後書き）

ボツ理由

・無意識だが滑らかに作っていた文
・毒電波すぎた
・柚希は何処へ向かおうとしているのだろう

あなたとわたし、ゆがむ（前書き）

柚希の人生の１００％を那由多が占めています

そのうちの６０％は家族愛、そのうちの４０％は保護者としてです

残り４０％は心配で占めています

死ぬまでにエヴァンジェリンを見つけて安心したいのです

あなたとわたし、ゆがむ

「柚希ってさ」

「ん？」

「老けてないよね」

那由多が俺を見ながら呟いた。

魔力か気が影響しているのか解らないが老化しないのだ。

俺も那由多も容姿が全く変わらないので年月の感覚が狂っている。

「２年くらいしか経ってないからな」

「１０年くらい旅をしている気がするんだよね」

違います。

旅に出てからカタログのメモ帳で数えていましたが３０年です。

２年で納得する那由多が心配になった。

「そんなに早く俺にヨボヨボになってほしいということか」

「違うよ　ただ、いつの間にか柚希が不老になってたら嬉しいなって」

勘が冴えてるな。

気付いたのかとドキリとしたが思い付きだったらしい。

那由多のポヤポヤは今日も絶好調だ。

オリ主のご都合主義パワーで俺の寿命が伸びてたり……有り得る。

「まあ、背が伸びたじゃん」

俺の身長がかなり伸び、歳は２０くらいになっただろうか。
学生服からパリパリしたスーツに変えた。
ゴスロリ一歩手前の服を着ている那由多の隣でラフな格好だと違和感が凄かった。
那由多が変えるべきだと思う。
どちらにしても時代を置き去りにしたファッションだ。

「ほら」

と那由多の横に並ぶ。
うわ、那由多ちっこい。

「小さいとか聞こえたんだけど」

「那由多ちっこい」

「傷つくからね　オブラートに包もうよ」

那由多の身体は死んだときのままらしい。
しかも不老にしたから身長が伸びる望みは無い。
エヴァンジェリンのように幻術でも使うしかないだろう。

「頭に手を置きやすいからいいと思うけどな」

「ナデポは……ナデポは……」

那由多の頭を撫でると目を細めて口元が緩んでだらしない表情にな

る。
最近は手を離そうとするとぐりぐりと頭を押し付けてくる。
可愛いやつめ。

「ダメだ、逃れられなくなってる……」

凹んでいる那由多の首根っこを掴んで進む。
磁気コンパスで方角を確認し、適当に歩いて見つけた街で魔法使いを捜す。
そして森で寝泊まり。

那由多は感謝パンチを続けているので起きるのが早い。
朝霧が漂ってるくらい早い時間なのでダルいが俺も眺めている。

近頃、戦争が始まったらしく戦場を避けるように移動している。
。
小さな争いが度々起きる程度だが被害が無いわけでもないのだ。
那由多は魔法使いに御執心らしく俺の意図に気づいていない。

人が大勢死ぬ様を那由多は見ていない。
原作の赤松ワールドまで国外に避けれれば良いと思う反面で永く生きる為に知っておくべきではないかという思いが相反する。
夢を抱いたまま原作とは別の戦場に踏み込んでしまった場合、チート仕様の俺とは違い、精神が生前のままである那由多には耐えられないだろう。
エヴァンジェリンとともに歩むのなら尚更だ。

どうしたものかと悩んでも答えは出ない。
役に立たないチート能力が怨めしく思う。

「すぐに見つかると思ったんだけどね、アルビレオなら」
「ん……ああ、ローブが特徴だからか？」
「ん、あの胡散臭い顔ならすぐに見つかるでしょ」
「……認識阻害でもかけてるんじゃねぇの」
「あ、あり得そうだね　気付かなかった」

魔法使いについてはやはり考え無しだった。
堂々と歩いてるわけ無いと思う。
能天気な那由多を見ていると何故俺が悩んでいるのだろうかと少しだけ苛ついた。
頭をむんずと掴み宙ぶらりんにする。

「痛い！　痛いから！！　突然何す……ちょ、強い、強すぎ！！
割れちゃうから、僕の中身が出ちゃうから！！」

少しだけ力を込めて八つ当たりする。
少しだけだ。
岩とか簡単に砕けるかもしれないけど。

「あー、痛かった……　いきなりどうしたの？」

「ナデポだ」

「頭を握ってたからね！！　絶対ウソでしょ！？」

「那由多がナデポはダメだって言うからだ」

「突然してきた理由にならないからね！！あと頭を握るくらいなら撫でてよね！！」

本人から許可を貰ったので撫でる。

指の間に髪を通してサラサラしたり、撫でつけたりと存分に撫でる。

「やっぱりダ、メ……　あはぁ……」

夢心地で目を細めている那由多を見ながら思う。

何故、俺はこんなにも心配しているのだろうか。

「あはぁ……」

本当に何故だ。

情報を聞くために立ち寄る町の殆どに活気がない。
人は貧しく、病も拡がっている。
国は戦争し、費用を民から巻き上げている。
借金の踏み倒しも当たり前のように行われているのだとか。

「柚希」

「どうした？」

「……やっぱりなんでもない」

那由多は考えている時間が日に日に長くなった。
夜、頻繁に魘されている。
今のように何かを俺に言おうとして考え直すのが毎日だ。
頭の中で考えが纏まっていないのだろう。
表情は曇ったままだった。

貧困か飢餓。
または両方が那由多の悩みだろう。
現代の感覚のせいで悩むのか。
不自由なく生きていることに罪悪感があるのか。

食欲不振の那由多にご飯を食べさせる。
言葉を弄して、少しでも悩みを忘れられるように。
時間をかけて、ゆっくりと。

投影で食糧をばら蒔けば悩みに関しては解決するかもしれない。
そんな単純な問題では無いが気休めにはなる。
それをしないのは俺の我儘だ。
大量の食糧を生み出すことが噂になるだけでも行動に支障を来す。
噂は噂を呼び、何が起きるかわからない。
時代柄魔女などと呼ばれて追われたり、異端審問にかけられるなどがあるかもしれない。
俺に益が無く、那由多に不利益が被ると思うと静観するしかない。

「柚希、あのね」

「ん？」

「色々心配かけてごめんね　……ありがとう」

俯いたまま震える声でそう言った。
俺は何時か死ぬのだからと割り切れるが那由多は違う。
那由多が思っているほど高尚なことは考えていないのだと叫びたくなる。
結局、返事の変わりに無言のまま頭を撫でるだけで済ませる自分が恨めしい。

なるべく町に近寄らないようにしたかったが那由多が望んだので立ち寄ることにしている。
俺たちは身形も身体もこの時代では異常なほど綺麗なので怯えて人

が近寄らない。
魔法使いを見付けることから今を見ておくことに目的を変えたらしい。

顔を青くして震えている那由多を背中に乗せ、落ちないようにする。
トラウマである何かがあるらしい。
眠るまで父親に謝り、母親を呼び、最後にシュユとやらに痛いと呟くのを繰り返している。

森の奥に着いたら建物を適当に投影して那由多を寝かせる。
魘されることもあるが手を握っておけば落ち着くので隣に座る。
オリ主の苦悩ってやつかなと場違いな事を考えながら額に置いていた濡れタオルを消した。

カタログを整理し、目ぼしいモノにチェックする。
俺の投影は日常面において付け入る隙が無いほどにサイキョーだ。
現代で売買されている全ての物品を魔力によって再現できる。

これほどのメリットに対して課せられているデメリットもある。
値段が高いモノほど魔力と投影できるまでの時間が長くなることや、記憶を失うと使えなくなるなど。
そして一番の欠点は能力の持ち主を殺すとことで投影能力を奪えることだ。
バレれば狙われるかもしれないが口外するような事でも無い。
だから、デメリットが気にならないほどに魅力ある能力なのだ。

那由多は日が暮れる前には起きたが顔色は戻っていなかった。
眠っているときに涙を流している日が増えた。

戦争が始まってから１００は経っただろうか。
長い争いになっているが停戦と民からの搾取を繰り返しているようだ。
被害は俺の知る戦争よりも遥かに少ないがそれでも大勢の命が失われている。

那由多は一人では眠れなくなっていた。
ご飯を食べさせるのも一苦労といった具合だ。
寝付くまでナデポしまくっている。
やはり俺は那由多のご都合主義に呼ばれた精神安定剤のような役割も持っているかもしれない。
放っておくと簡単に死ぬくらいストレスに弱い。

略奪されている町の近くを通った。
俺が行き先を変える前に那由多は走り出していた。
深い森の中にいても聞こえる悲鳴と怒号。
駆け付けたときに見たのは軍が民から略奪して補給を済ませている真っ只中だった。
那由多は壊滅が進む町から顔を背け、森へ走って行った。
こちらに気付いた全ての兵の息の根を止めてから俺も後を追った。

「う……　うぐっ……」

森の中で青白い顔色の那由多が吐いていた。

四つん這いになって、涙と鼻水で顔を汚し、苦しそうに唸りながら。

。

俺は呼吸が乱れて震える背中を摩ることしか出来なかった。

「ゆ、ゆず……き……」

落ち着くまで待ち、吐くのをやめた那由多を膝に寝かせる。

気分が少しでも良くなればと汚れた顔をタオルで拭う。

手を握り、錯乱しないようにゆっくりと。

顔色は未だに真っ青だ。

「……ぼくは」

拭い終わると那由多が弱々しく呟いた。

焦点の合わない瞳で俺を見詰める。

返事をするように頭を撫でる。

「どう、したいのかな……？」

俺は何も答えなかった。

答えられなかった。

神様に望んで平気な俺は何も感じなかったから。

「どうしたら、いいのかな……？」

涙で濡れる目を隠すように濡れタオルを置く。
握った手の力は僅かにしか感じない。

「好きな漫画の世界に来て、好きなキャラと会うために来て、強くなるために修行して、凄い力を手に入れて
なのに、なのに……人を助けることすら出来ない……」

「那由多……？」

那由多はゆっくりと上半身を起こした。
その拍子にタオルの落下が、酷く遅く感じた。
呼び掛けても反応が無い。

「僕はいつまで弱いままなの！？」

俺の肩を掴んで叫んだ。
あまりの力に肩が軋むがそれどころではない。
目の焦点は合っておらず、輝くような光が失われていた。
那由多が空を仰いだ。

「殴られて！！
無視されて！！
殺されて！！

それでも会いたくて！！
柚希に頼ってばかりで！！
それで、それで、ずっと目を逸らして、救おうと決心した町から逃げ出して……」
「那由多！！」
声を張り上げて名前を呼ぶ。
那由多は肩を震わせ、気づいたように俺と顔を合わせた。
涙で頬が濡れている。
「柚希」
「……」
「僕を置いていかないでね……」
そう言って糸が切れたかのように力無く俺に寄りかかる。
少しすると寝息が聞こえてきた。
錯乱して気を張りすぎていたようだ。
「俺には少し……いや、かなり重いかな」

トラウマの他にも色々と問題を抱えているようだ。
見捨てればいいのだろうが、心配でそれもできない。
儘ならないモノだな、と内心で呟いて立ち上がろうとすると那由多が服を掴んでくる。
とりあえず胸に抱えてこの場所を離れることにした。

あと眠っている那由多に場違いながら言いたいことがある。
俺の死亡フラグを立てるな、と。

オリ主の苦悩と頼れる友人のコンボはマズイ。
俺の死を糧とした成長しか思い浮かばない。
エヴァンジェリンと出会わせるまでが俺の寿命かもしれない。

そういえば最近は鼻血がよく出る。
溜まっているのかハイライトの消えた瞳の那由多に欲情したのか、どちらにしても最低だ。
気落ちしながら鏡を見ると血走った目をした俺の姿が映る。
うわぁ……。

頭痛が激しい。
我慢のし過ぎだろうか。

まさかさっきの死亡フラグ云々が……ねぇな。
大人しく寝ることにした。

あなたとわたし、ゆがむ（後書き）

今回のまとめ

・ご都合主義によって老けない柚希
・オリ主らしいトラウマ持ちの那由多
・１５０歳くらいの柚希

次回も

また見てオリシュ！！

じんせい、ゆうげん（前書き）

転生の準備が整っています。

じんせい、ゆうげん

今まで旅をしてきたが異端審問は目にしたことがなかった。
教会の指示で行われる正式なモノはそれほど頻繁に行われていない。
行われても死刑が執行されることは少ないようだが『魔術』という
眉唾な情報を判断材料に入れてから劇的に変わる。

魔女狩りが最盛期を迎える１５、１６世紀の前にエヴァンジェリン
を見つけてしまいたいのだが諦めるしかない。
片手で目の前の豚のような聖職者の首を握り、宙に浮かせながら内
心で溜め息をつく。
コイツの話だと流行り病、恐らくペストと飢餓が魔女のせいだとい
う噂が流れているらしい。
聖職者を笑顔で可愛がって情報を集める作業とその情報を元に片っ
端から捜す必要が出てきた。

今は一人で情報収集を行っている。
那由多は山奥で魔女狩りの被害者や孤児の面倒を見ている。
何故かというとただの気休めだ。

戦争が終わりを迎えた頃は本当に酷かった。
いや、略奪が行われていた町に寄ってからかもしれないが時間とし
てはそれほど違いも無い。

何が酷かったかというと片時も俺から離れる事が無いくらい。

起きると寝床に入って俺に抱き付いていたり、日中は腕にくっついていたり、夜は別の寝床なのに朝起きると寝床に……という感じだった。
用を足すときや風呂も自重しないくらいだった。
いや、一緒にしてないけれども。

このままじゃマズイだろうということで一番反応を示した孤児を拾って山奥に村を作った。
そんな感じで色々な場所に配置し、近くで何か拾ったら連れていく程度だ。
村の見回りのために一人で活動できるようになった那由多と別れて俺がエヴァンジェリンを捜している。

水源とか植物の種、農作業用の道具を用意したので那由多の指示で頑張っているらしい。
俺は投影するだけであまり関わっていないので詳しく知らないのだ。
オリ主の仕事だと思うので那由多に任せている。
本心は面倒なだけだ。

金目のモノが積まれている部屋の中央で豚のような聖職者を持ち上げていると鼻血が流れてきた。
一日一度は流れるのだ。
血が昇りやすいのだろうか。
呻いて煩いので床に叩きつける。
足しにもならない情報を得て用が無くなったために別の教会に行くことにした。

地下の隠し部屋らしく一階から泥を投影して立ち上がる気力の無い豚ごと部屋を埋める。
証拠隠滅が簡単にできたし金品も奪えて上機嫌だ。
投影できるのだがタダという事実が良い。
被害者を巨大なコンテナに詰めて持ち上げる。
近くの村に連れていけば那由多が何とかするはずだし。
金品を民家にシュウゥゥゥッ！！超☆エキサイティング！！しながら走る。
気分はエンディングのゴエモンだ。

近くの村にコンテナに詰めておいた被害者の対応を指示する。
被害者が俺を魔女と呼びながら怯えていたが無視。
みんな同じ反応だから慣れてしまった。

そして、来ていた那由多とご飯を食べる。
ジャガイモを村人に振る舞われた。
子供がニコニコしながら「魔女さまどうぞー」と言いながら蒸かしたジャガイモを渡され、村を歩くと村人に魔女様、魔女様呼ばれている。
本当に何が起きたんだ。

ちなみに男性でも魔女と呼ばれる。
ハンパない。

ジャガイモの栽培が上手くいっているようだ。
流石、無敵のジャガイモ先生。

「ジャガイモって凄いね　収穫するとこんなに採れるんだよ」

笑いながら手を広げて表現する那由多を見ながら、思い付きだったが村を作って良かったと思った。
魔女狩りの被害者を見ると泣きそうになるが、錯乱することもなく安定している。

「聞いてきた話だと、人拐いが増えているそうだ」

「……」

「孤児や魔女がごっそり拐われるとか」

「その人拐いは柚希だよね！？」

「きゃーすてきー」

「えー……」

素敵な誘拐が頻発しているらしい。
那由多に話す気は無いが聖職者が行方不明になっているという噂もある。
強力な魔女の仕業だとして引きこもっている聖職者もいるとか。
今度会いに行くからゆっくりはなそうね！！！

他にはかなり遠い地域に黒髪の魔女が一人でさ迷っており、軍を壊滅させたとか。
この時代の魔女は群れを作ると言われているのでかなり珍しい。
魔女狩りも激しくなりそうだ。
吸血鬼の話は時々あるが明確な情報は無い。

今日も日課を爽やかにこなす。
影が薄く、認識されない状態で教会に入る。
迷える子羊のように震えながら金品を投影。
飛び付いた聖職者と肉体で対話。
潰れたトマトを泥で埋める。
被害者をコンテナに詰める。
金品でゴエモンごっこしながら帰る。

見事なまでにバレないのは俺の影が薄いおかげだろう。
一般人クラスまで濃くできるが村以外では薄いままだ。
那由多は違いがわからないらしい。
オリ主の片鱗をこんな部分で発揮しないでエヴァンジェリンか魔法使いを引き寄せろと言いたい。

俺の他にも誘拐している人間がいるが基本的に無視している。
態々助ける義理も無いのだ。
ただし、見掛けたら那由多が言っていた「やらない善よりやる偽善」に則って潰れたトマトにする。
影が薄いので気付かれないが。

噂が増えていた。
町に幽霊が出るとかいう話だ。

半透明の男の幽霊が時には孤児を拐い、時には巨大な箱を片手に、金品をばら蒔きながら町を去る。
そして、男が現れた町から魔女と聖職者は消えるらしい。

敬虔な神の使徒を消し去ることから高位の魔女であると恐れられているとか。

……ああ、俺か。
村で魔女と呼ばれる理由がわかった。

さらに黒髪の魔女の活動地域が少しだけ移動している。
魔女を排除しようと動いた何とか教の聖職者と領主の軍が虐殺されたとか。
そのうち接触するかもしれない。
那由多が本当にオリ主なら魔法使いだろう。

好戦的なのが気になる。
吸血鬼の噂も聞いた。
詳しい内容はわからないがハンターに追われているらしい。
活動地域はわからない。

那由多が俺の死亡フラグを立てて早１００年。
村人たちは何代も代わり、全く変わらない俺たちに怯える者が出てきた。

薄々俺が不老状態だと気付いていた那由多はこの事から嬉しそうにしていた。
俺が死なずに原作まで共にいられると思っているのかもしれない。
笑顔を見るのがキツいとは思わなかった。

村人総出で俺たちに出ていくよう言った。
貯めた財産は村長の家の地下にあるとだけ伝えて那由多と去った。
俺の腕にしがみついている那由多の顔を見れなかった。

エヴァンジェリンの明確な居場所をハンターから得ていたのでそちらへ向かう。
黒髪の魔女も未だに活動している。
近頃はエヴァンジェリンが潜伏しているすぐ隣の町や村にいるという噂が警戒心を煽る。
目的がわからん。
転生者か来訪者、ハンター、魔法使いの何れかの可能性がある。

「柚希、もう休んだほうがいいよ……」

「エヴァンジェリンの位置が近い　逃すわけにはいかないだろ」

頭痛が酷い。
熱も凄まじい。
鼻血も流れる。

かゆ
うま

かゆいうま、でも構わない。
とりあえず俺の限界が近い気がする。
エヴァンジェリンのいる場所へ背負われて向かっている。

那由多の制止を振り切って進む。
意識が朦朧としていてヤバい。
殆ど無意識で走っているのだ。
エヴァンジェリンを見つけたら楽になるだろう。
死ぬってことだが。

今はチート仕様の身体に脳の要領がついてきていないことにより、
投影も満足に行えない。
那由多のように不老に堪えられる身体では無いからだ。
５０年くらいで死ぬ予定だった俺のミスだ。

若かったために思考し続けて溜まった２５０～３００年の経験を詰め込むには難しかったようだ。
それに投影もある。
一般人の脳には大それた能力であったらしく、カタログを読むにも苦労するようになった。

目的の村に近付くにつれて白髪が増え、抜けていく。
体にシワが増え、手足に皮が目立つ。
それでも生きているのはチート能力のお陰か、意地か、那由多の気持ちか。

「柚希！！」

凄まじい早さで老化する俺に気づいて那由多が叫ぶ。
目を見開いて。
それでも立ち止まらないのは有り難い。

「那由多、俺はお前に会えて良かったと思う」

耳に語りかける。
大きな声を出すことができなくなったてきた。

「柚希、何を言ってるの……」

旅の目的は魔法使い捜索、そしてエヴァンジェリンと那由多が出会う事。
これを満たすために俺はこの世界に来たのだろう。
那由多が望んだために起きたご都合主義の恩恵か、呪いか。
人の身では有り得ないほど長く、永く、生きた。

その条件が達成された時、俺は用済みとなる。
ご都合主義の効力も消えかけている。

目的を避け、ご都合主義で生き続けたとしても脳が壊れて廃人になっていただろう。
それほど人間のまま長く生きるのは難しい。
逃げた場合のペナルティなのかもしれない。

「俺との旅はここで終わりだ　見てわかると思うが進まなかった老化が今、一気に進んでいる」

ルールブレイカーでエヴァンジェリンを刺したら俺のようになるだろう。
骸骨のような醜い俺を見て、那由多はどう思うのだろう。

「オリ主（笑）は別れから成長する　きっと那由多も立派なオリ主になれるはずだ」

「嫌だ、嫌だ、嫌だ！！　柚希がいなくなるなら僕は成長しなくていい！！」

那由多はりながら首を左右に振っる。
顔を涙で汚しながら。

「俺もそうしたかった」

「過去にしないでよ……お願いだから……」

そうはいかないんだと呟く。
望んだ事が違うから。
俺は転生を。
那由多は不老を。
ずっと一緒になんていられない。

「フラグ立てて、英雄になって、原作を掻き回せ　オリ主だろ」

「嫌だ、嫌だ……柚希にフラグ立てるからさ、一緒にいてよ……」

「友人フラグだからな　凄く良い扱いだろ、俺」

那由多がエヴァンジェリンが捕まっている町のすぐ近くで立ち止まった。

「なあ、那由多」

俯いている那由多に話しかける。
返事は無い。

「俺は……」

なんとか那由多を進ませようと言葉を発するも思い浮かばない。

「遅かったですね、那由多」

回らない頭で悩んでいると、目の前に黒い那由多が現れた。

3Pカラー、だと……。

「須臾(シュユ)……」

このタイミングでまさかの新キャラかと思ったら那由多の知り合いらしい。

もう死亡フラグがガチで立っているこのタイミングでこれは勘弁してくれ。

かっこよく散らせろ。

じんせい、ゆうげん（後書き）

今回のまとめ

・潰れたトマト
・二人の作った村が互いの遺された金品を狙って争っているようです
・ご都合主義の束縛

ご都合主義は用法・用量を正しく使ってください

副作用で人間の限界を超え、ボロボロになってしまう場合があります

かれはまう、わかれ（前書き）

転生の準備が整っています。

かれはまう、わかれ

２Ｐカラーの那由多。
３Ｐカラーのヤミ。
そいつを表す言葉はそれで事足りた。
那由多とは違いは髪と瞳、そして服装。

「那由多はエヴァンジェリンが好きでしたから」
腰まである長い髪は黒一色で構成されていた。
風によって髪がさらさらと流れ、黒い髪を深い緑色にみせる。

「待っていましたよ」
瞳は吸い込まれるような深い黒。
光は一切灯っていない。

「那由多を殺して私のモノにして、満足でした」
暗く、黒い喪服を着ていた。
闇を纏っているような錯覚を覚える。

「でも那由多は突然、光に包まれて消えました　これで絶望」
無表情に淡々と。
機械的に口を動かしている。

「自殺した私に神様は教えてくれました　那由多は此処にいるのだと」

那由多は顔を青くし、震えている。
そいつは変わらず告げている。

「追い掛けて、見付けて、私は幸運です」

にたり、と。
血のように紅い唇が三日月を描いた。

「もう一度殺して」

命を貰います。
永遠を私と、那由多で。
そいつはそう言った。

重度のメンヘラだと……！？
那由多ルートのラインナップが激しすぎる。
原作前にこんなので大丈夫だろうか。
やべぇ、心配で死にたくねぇ。

「那由多、あいつは？」

「須臾は、妹……僕の双子の……」

倒れそうなほど顔色が悪い。
ハイパートラウマモードに入ってしまった。

呟きから言葉を拾う。

トラウマの原因の須臾（シュユ）とやらは双子の妹らしい。
姿を女っぽくしたと言っていた那由多と瓜二つ。
ベースを須臾にしたのか……それだと鏡を見る度にトラウマが甦る
だろうから違うはず。
須臾が那由多に合わせたのか。
……謎だ。

須臾の話からすると那由多を殺したらしい。
妹に殺されるとか、トラウマになるよな。

那由多のオリ主への道が険しすぎる。
どう考えてもオリ主（笑）の可能性は無い。

原作前で
・孤独を知る
・長年連れ添った親友が死にかけ
・ヤンデレ妹参上

那由多のオリ主は確定したな。
鬱系かもしれないが。
原作の赤松ワールドまでが地獄だ。

「俺は応援してる　那由多がオリ主になるのを、な」

ヨボヨボの体で立ち、那由多の頭を撫でる。
チートで良かったと感じる。
どれだけ年老いても尋常ではない力を発揮できるのだから。

「楽しかった　またな　……オリ主になれよ」

約束だ、と。
笑いかけるのは出会ったとき以来か。
俺は何時も無表情だったから上手く出来ているかわからない。
昔は人並みだったが今は骸骨のようで、姿が違いすぎて寂しく感じる。

ひょい、と那由多を持ち上げ

「柚希ぃぃぃぃ！！」

エヴァンジェリンのいる方向に全力で投げた。
那由多は星になった。
須臾は無表情が鳴りを潜め、目を見開き、口を大きく開けている。

「須臾、だったか　那由多を殺させるわけにはいかなかったからな」

「貴方は誰でしょうか？」

「俺は柚希　那由多の兄だ……すぐに『だった』に変わるだろうが」

無表情に戻った須臾の問い掛けに答える。
歳の差なんて関係ないのだ。
孫と曾祖父くらいの見た目だが。

「それなら私の兄ですか？」
「……それは知らん　例え妹だとしても生かしてはおけない　那由多に悪影響だからな」
こんな爺を兄かと問うコイツはやはり那由多に似ているのだ。
「心配しなくても大丈夫です　那由多は何も考えられないようになりますから」
似てるって言ったの撤回してもいいよね？

右腕が重力に引かれている。
那由多を投げた反動で折れたようだ。
力が強すぎた。
「目が濁ってるよ、嬢ちゃん」
能力の投影はとある正義のミカタを参考にした能力だ。
原型を留めていないが、遡れば構成や能力としての本質は同じだ。
故に俺の使う投影は固有結界から零れ落ちた能力なのだ。
カタログを開く。
開く。
開く。

そして、投影する。
カタログを、現実に。
幾千、幾万の紙切れが空を覆い、壁を作る。
詠唱は要らない。
カタログを全て呼び出すだけで事足りる。

「あら……傷も付きません」

須臾が壁際に一瞬で移動していた。
俺には分からないのだが何かの能力を使っているようだ。
カタログを殴ったり、燃やしたりしているが変化は起きない。

「『無限の日常（アンリミテッド・ニート・ライフ）』ってな」

包んだ世界を別世界に接続するだけの固有結界だ。
投影は生前の世界に繋ぎ、魔力を対価に神様を通して物品を得る。
生前の世界以外の次元を知らない俺は少しだけ異相をズラし、須臾が那由多を追えないようにしているだけだ。
俺が死ぬまでの時間稼ぎでしかない。
那由多がエヴァンジェリンと出会って逃げるまでの悪あがき。

「兄様、私は那由多を追い掛けたいのですが　実力行使も辞さない気分です　不快ですから」

須臾こちらに振り向きながら言う。
背後が燃え上が、炎の巨人を顕現した。

「スピリット・オブ・ファイアです　可愛いでしょう？」

現代っ子ならイノケンティウスを呼べと言いたい。
……俺の魂、喰われるんじゃねぇの。

「死んだらどうにかなりますよね　考えるのも面倒です」

いきなり燃やされる俺。
もう少し悩もうぜ。
例えば「もしかしたら念能力で死者の念になるかも」とか「死んでから発動する能力かも」とか。

躊躇い無く燃やされたら俺の見せ場が終わる。
冷静に考えてるが物凄く熱い。
死ぬかもしれん。
あ、死にかけだった。

チートスペックは伊達じゃない。
未だに燃え尽きない。

「ゆっくりしんでいってください！！！」
手加減されてるだけだった。
生きたまま火炙りとかヤバい。
ヤンデレ怖い。

だが、このまま死ぬわけにはいかない。
俺にも意地がある。
酸素を無くせば効くかもしれないが原作のように抜け道がある気がする。
暇潰しに考えた必殺技を使うことにする。
殺せれば儲けモノだ。

「まあ、何かの縁だ　死んでくれ」

展開しているカタログで投影。
対価として魔力や気、魂を払う。
死にかけでどのくらい可能かはわからない。

『永夜抄』

売買されている月の一部を投影する。
頭上に巨大な岩が現れる様は圧巻だ。

「素晴らしいです　壮大で、勇猛で、見事で、ドキドキします　恋

でしょうか」

いいえ、変です。

「ですが、恋と潰されるのとは別ですよね」

スピリット・オブ・ファイアが受け止めていた。
俺を燃やしていた炎が消えた。
余裕が無いのだろう。
悪あがきは最後まで、だ。

「ブロークン・ファ……」
「少し重いです　死んでください　恋してました」

俺の胸から血だらけの腕が生た。
壁際にいた須臾が笑顔で後ろに立っている。
お前、壁際にいただろうが。

「驚愕ですか？　『固有時制御』ってやつですよ　身体能力と相まって便利だと思いませんか？」

ぐちゅり、と何かを握られた。
血の味が広がる。
目が笑ってねぇし。
なにこいつこわい。

世界が崩れ、『俺』が散る。
硝子が割れる音がする。
大量の輝く粒子が空に舞う。

那由多は大丈夫だろうか。
俺が隣にいなくても、ずっと生きていて欲しい。
弱くて、寂しがりで優しい君が。
安心できる隣が。
好きだったから。

那由多は俺を忘れないだろうか。
いや、忘れないでいて欲しい。
忘れられるのは、とても寂しいから。

「ああ、良い魂です　この世界で見た何よりも素晴らしい、輝き」

最期に聞こえた言葉は須臾のモノで。
最期に見た光景は大きな燃える口だった。

遠ざかる意識。

死にたくない、と思った。

『枯葉　柚希　が　生存中に　雨音　那由多　はエヴァンジェリンと接触できませんでした』

『任務の失敗をお知らせします』

『報酬は支払われません』

『御苦労様でした』

かれはまう、わかれ（後書き）

【名前】

枯葉（カレハ）　柚希（ユズキ）

【年齢】

１６～３００歳

【概略】

影の薄さが原因で死亡。
諸々の事情を経てネギまの世界へトリップしたトリッパー。
雨音（アマネ）　那由多（ナユタ）のために自分は送られたのではないかと思い、世話をする。
那由多とは言葉が無くとも通じ合う仲。

自分を糧に成長すれば、とも思っていた。
が、那由多が心配で死にたく無かった。
過保護である。

那由多に「忘れて欲しくない」といった想いがある。
影の薄さが原因で親しい人物がいなかった彼の心を顕している。

【能力】

『能力の限界突破』

計り知れない力を持っていた。
持っていただけだった。

『無限の日常』
別次元に接続出来る固有結界。
零れ落ちた投影は神様のおまけ。

『投影』
凄く暮らすのが楽になる素敵能力。
能力の所持者を殺すことで奪える。
ただし、本来の所持者である柚希にしか固有結界は使えない。

『ナデポ』
大きな暖かい手で撫でるだけ。
一日一回以上ナデポされるのが那由多の日課だった。

『ニコポ』
無表情の柚希には意味の無い能力。
那由多の警戒心を無くした。

【必殺技】

『チャーハン爆撃』
降り注ぐチャーハンは無情にも全てが爆弾だったのだ……！！
那由多の好物。

『壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）』
物品を爆発させる。
支払った魔力分の威力。
ショボい。

食べ物は飲み込まれると相手の魔力に染まるので爆発させられない。
柚希の支配から切り離すことで『完全な一』として独立できる。
半永久的に残る。

『デコピン』
デコピンの限界を突破した威力を放つ。
ぽけぽけの那由多はよく吹っ飛ばされる。
少し嬉しそう。

『ぺしり』
額をぺしり、と軽く叩く。
注意するときに使う。
那由多はされるのが好き。

『フェイトそんのバリアジャケット』
広場が出来た。
露出が凄い。
那由多が着たら色んな意味でヤバい。

『ナデポ』
那由多は魔の手から逃れることが出来ず、自分からねだるようになった。
顔を赤くしてもじもじしながら頼む。

『泥』
汚物を生き埋めにする。

『エンディングのゴエモン』
ゲームクリアするとエンディングでコバンをばら蒔くゴエモンごっこ。

民間にシュウゥゥゥゥッ！！の被害者多数。
金品が超速で飛んでくるからだ。
ありがた迷惑。

『無限の日常（アンリミテッド・ニート・ライフ）』
柚希の固有結界。
脳内からカタログをばら蒔いて発動。
絶対防御専用。
火力面から見ても、効果から見ても、貧弱。

『永夜抄（えいやしょう）』
満月が欠けて云々の異変から名前を借りた。
返す気はない。
展開したカタログの各ページの限界まで月を投影して落下させる。
単純に大質量に任せただけ。
老人の柚希でも壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）すれば街三つは吹き飛ばせる。
ピーク時の１００歳くらいならロシアを地図から削り取れた。

さようなら、かぞく（前書き）

このページは枯葉　柚希の【カタログ】です。

枯葉　柚希の死亡が確認されました。

条件に則り、能力【投影】が雨音　須臾に譲渡されました。

このページは雨音　須臾の【カタログ】のページになりました。

さようなら、かぞく

雨音　那由多にとって家族は憧れだった。
彼は『優しさ』に飢えていた。
相互の『愛情』を望んでいた。

ハーフである父は女遊びが酷かった。
物心ついてからまともに会話した憶えが無い。
殴られないように怯えながら過していた。

気弱な母は常に父の言いなりだった。
言われたら反抗もせずに従うだけ。
那由多と須臾を産んだ事で夫に煙たがられていることに気付いた。
その時から自分の子供を無視するようになった。

それでも生まれた時から一緒にいる双子の妹は彼に心を開いていた。
普段は無表情だが自分に優しい妹。
彼は自分が間違っていなかったのだと信じていた。

彼は家族が好きだった。
好きだと思い込んでいた。

殴られても、無視されても、何時か自分を好きになってくれるはずだと信じていた。

彼は空腹だった。
親から満足に食べ物を与えられず、妹が空腹で辛くないように彼の分も与えていた。

そんな日々の中、彼が高校に入学した日は珍しく豪勢な朝ごはんだった。
自分の思いは報われたのではないか。
家族として仲良く暮らせるのではないか。
喜びで満ちていた。

そこから彼にとって信じられない出来事が起きた。

上機嫌で帰ってくると母が宙に浮き、静かに左右に揺れていた。
天井に引っ掛けた紐で首を吊っていたのだ。
直視出来ない何かが床に拡がっていた。

気が狂いそうになりながら父に助けを求めた。
父は舌打ちして家から出ていった。
追い掛けようとして、倒された。

無表情だった妹が自分に覆い被さっていたのだ。
震えながら、笑顔で自分の首を締める妹。

あまりの出来事に頭が正常に働かなかった。

「父さん、ごめんなさい……　母さん、母さん……　須臾、痛いよ……　苦しいよ……」

そう呟いて彼は二度とその家で起きなかった。

新しい世界に行く際に神に願った。
嫌な思い出を忘れさせて欲しい。
代わりに精神はそのままにしておいて欲しいと。
忘れようとする不甲斐ない自分への戒めとして。

来訪して一年、彼は思い出と過ごした。
家族と朝ごはん、そして妹と寝ていたベッド。

嫌な事を忘れた彼が憶えているのはこれくらいだった。
憶えている日常はほんの少しの事だけだった。

柚希と出会い、彼は優しさと愛情を知った。
自分の我が儘を聞いてくれた。
呆れながらも一緒にいてくれた。
頭を撫でてくれた。

何時も自分を見ていてくれる柚希から『家族』を知った。
幸せだった。

苦しむ人を見て思い出した。
死に逝く人を見て思い出した。
忘れていた記憶。
消さなかった記憶が甦った。

昔の『家族』と今の『家族』。

現実と理想。
心が揺れていた。

那由多は走った。
柚希の元に。
エヴァンジェリンとは会わなかった。
それどころでは無かったから。

気持ちが溢れる。
早く。

悲しみが。
速く。

感謝が。
疾く。

まだ柚希に言いたい事がある。
おねがいだから、しないでよ……。

光が舞うそこに着いた時、柚希は血に沈んでいた。
須臾は笑っていた。

動かない『家族』。
動きを止めた『家族』。

大事な『家族』が死んでいる。
殺した『家族』が生きている。

『家族』に生きて欲しかった。
『家族』を殺したい。

『家族』が好き。
『家族』が嫌い。

優しい『家族』が好き。
殺した『家族』が嫌い。

嫌いなら『家族』じゃないと思う自分。
双子なら『家族』だろうと思う自分。

どうしたらいいかな、と問い掛けようした『家族』はいない。
好きな『家族』がいなくなってしまった。

好きな『家族』。
違うよね。
好きだから『家族』なんだ。

嫌いな『家族』は『家族』じゃなくて。
嫌いなんだから『敵』のはずで。

好きな『家族』を殺した『敵』は嫌い。
好き柚希を殺した須臾は嫌い。

僕の好きな柚希は『家族』。
双子の須臾は嫌いだから『敵』。

昔の『家族』との別れ。
こんにちは『敵』。

今の『家族』との別れ。
さようなら『家族』。

涙が止まらなくて、頭の中がぐちゃぐちゃで。
柚希に言いたい事があったのに何も言えなくて。
須臾を殺したいほど憎くて何も出来なくて。

どうしたらいいのかと考えて。
もやもやして。
気持ち悪くて。
吐きそうで。
柚希に会いたくて。

ああ、そっか……

「須臾ぅぅぅぅぅ！！」

原因は目の前にいるのだから。
殺したら気持ちが晴れるはずだ。
だって嫌いな『敵』だもの。

雨音（アマネ）　須臾（シュユ）は狂っていた。
正しくは狂った、だが。

歪な家族に繊細な彼女は耐えられなかった。

最初に表情が死んだ。
人と溝が出来た。
全てに躊躇いが無くなった。
愛情をくれる兄だけを見ていた。
両親が見えなくなり、愛情を与える兄だけを求めた。
求め続けた。

家族を求める兄。
兄だけを求める妹。
気持ちを三等分する那由多。
気持ちをただ一人に向ける須臾。

空回りする気持ちに須臾の苛立ちは募るばかりだった。
彼だけが欲しかった。

だから彼を独占した。
歓喜に奮えながら、彼の白い首を絞めた。

死にかけても那由多の心を独占できない事に苛立ったが身体を自分のモノにできて喜びに泣いた。
光に包まれて消える兄の姿を見るまでは。

絶望して良かった。
自殺して良かった。

那由多がいる。
私を見ている。

私だけを見ている。
私だけに感情を向けている。

喜びを感じる。
興奮を感じる。

「須臾ぅぅぅぅぅ！！」

私に憎悪している。
クズにばかり構っていた那由多が私にだけ。
兄様を殺した私にだけ。
那由多の感情の全てを感じる。

「素敵です、那由多　もっと私を見てください　もっと私に心を開いてください　もっと私を愛して、もっと私を求めて、もっともっともっと！！」

ああ、私はなんて幸運なのでしょうか。
二度も那由多の命を好きに出来るなんて。

さようなら、かぞく（後書き）

今回のまとめ

・殺したい那由多
・殺したい須臾
・双子のシンクロ

次回も

ハートフルでテンプレートな展開に期待してね☆

それじゃあ、また見てオリ主！！

NG集02（前書き）

『ご都合主義・極』

柚希特有の裏スキル。
オリ主（笑）のご都合主義が究極レベルで発動する。
善悪問わずに。

NG集02

転生した。
まだ赤子で目も見えないし動く事も出来ない。
早く那由多を捜しに行きたい。

「アルベールは良い子ね　静か過ぎるけど」
「ああ、なんたって俺たちの息子だからな」

アルベール。
まさかのオコジョ。
やっちまったんだぜ／（＾ｏ＾）／
まあ那由多なら大丈夫だろ。

小さい頃から修行してみた。

もう一度死ぬのは勘弁だならな。
気や魔力が感じ取れないし使えない。
身体能力はチートなのだが。
ああ、そういえば俺は人間に転生していた。
オコジョじゃなくて良かった。
原作まで待つべきなのだろうか。

巨大な鳥とカエルっぽい何かに襲われた。
フルボッコにしたが飛んで逃げられた。
次に現れたら見世物としてテレビに売り込み、那由多に合図を送ろうと思う。

学校帰りに浮いてる変態に襲われた。
本を持っている女の子が可愛い。

「ラドム！！」

「痛っ　ルイズを生で見るのは初めてだ　デコピン」ドュクシ

「（ルイズ？）ごぶはっ！！　ココ、もっと強力な術を！！」

「テオラドム！！」

「うお、痛え　チョップ」ゴシャア

「痛い程度で済む術じゃ……ぐあぁぁぁあぁぁ！！」

「街を壊しやがって」

「デコピンで家を吹き飛ばしたクセに何を……」

「死ね」

「ココ！！」

「ディオガ・テオラドム！！」

術とやらで爆撃された。
まさかゼロ魔のルイズに襲われるとは。
転生者だろうか。
爆発は耐えたがルイズに触られたら何故か気を失った。

目が覚めるとデモルトとかいう巨大な魔物に抑えられていた。
とりあえず三日くらいで慣れたので重りの代わりにする。
魔物のパートナーにされるらしい。
人間が本を唱えないと術を使えないとか。
不便だよな。

「デモルト重ぇ」

「アル、普通はその程度で済まないわ」

「いいか、レイラ　普通とか魔物がいる時点で知らん」

パートナーはレイラという娘だった。
冷静沈着だが子供っぽくて俺の料理を笑顔で食べてくれる。
那由多とは違った保護欲を掻き立てられる。

「デモルトを肩に乗せたままで料理……」

「ロード、玄宗がデコピンでやられましたゲロ」

ゾフィスに城の警護をお願いされた。
断った。
考える時間すら必要無し。
レイラと遊ぶ時間のためだ。
ラドムされたが当たらなければ意味無いし。
レイラを石にするとか言い出した。
フルボッコにした。

「アルは遊んでくれなくなるの？」

「そんなことは無いな　レイラとなら何時でも何処でも何度でも遊ぶに決まってるだろ」

「じゃあ警護してもいいでしょう？」
諌められたので仕方無く警護することにした。
持ち場を離れて城をフラフラする。
レイラを膝に乗せて外壁を眺めていると巨大なVが飛んでいった。
何事だし。

戻ることにする。
ダイナミック帰還。
壁を破壊して持ち場に戻るだけ。

Vが消えたらしい。
見知らぬ男女と現代の魔物が俺が開けた穴から脱け出して行った。
デブが五月蝿ぇ。

レイラは現代の魔物を助けたいらしい。
仕方無くミグロンしようとしたらメルヘンな馬が現れた。
意外と強い。
メタボの本が燃やされて消えた。
唯一世界の為になった事だろう。

「いいのか？」
「……何がかしら」
「見送ってしまって　ゾフィスから離反することになるぞ」
「いいのよ　間違ってるのは私たちだもの　待ってるって言ったし、

ね」

現代の魔物を見送ったレイラは嬉しそうだった。
パートナーは何よりも大切だと常日頃から俺に言っている。
信頼し合っている魔物と人間の組を見て琴線に触れたのだろう。

「それにね」

「ん？」

「アルがいるから不安は無いわ」

今夜はチャーハンだな。

NG集02（後書き）

ボツ理由

・流石にネギまを放置できない
・先を考えてない
・気が向いたら続きを書く

あなたがしねば、まんぞく（前書き）

『人間の枠を破り、生存した２８０と余年』

『白の世界に』

『存在する』

『それが貴様の罪だ』

『彼の罪』から抜粋

あなたがしねば、まんぞく

一日一万回。
感謝を込めた合掌の後、正拳突きを行う一連の動作を那由多は日課としていた。

音を置き去りにする事は一月で成したが変わらず、一日に一万回。
回数は増やさなかった。
柚希への感謝は何時までも変わらないという意思と無償の恩に欠片でも報いるための意志。
回数を増やして少しでも満足してしまう自分を律するために一万回。
柚希への感謝、神様への感謝を胸に巨大な千手観音像を背後に顕現させる。

『百式観音』に至った。

そこから正拳突きは二度変化した。

一度目は空気を切り裂くような正拳突きにより轟音とともに衝撃波が発生。
踏み抜いた地は衝撃により砂ぼこりが舞っていた。

更に二度目の変化は正拳突きを行っても何も起きなくなった。
極めたという慢心を消すために動作の速さを向上させ続ける。

昨日よりも今日。
今日よりも明日。
感謝を忘れずに一万回。

空間は無音、空気は不動、衝撃は皆無。

到達したのは神速。

那由多の正拳突きは世界から切り離されていた。

序章・終『あなたがしねば、まんぞく』

那由多の背後に現れた千手観音を象った像が掌を振り降ろす。
須臾を捉える為に放たれた一撃は、炎の巨人であるＳ．Ｏ．Ｆ（スピリット・オブ・ファイア）に阻まれた。

阻まれた事を皮切りに観音像が流れるような掌打の連打を浴びせた。
最初は点のような攻撃だった。
破壊された部位が瞬く間に再生できるようなＳ．Ｏ．Ｆにとって極僅かな傷。

小さな点が拡がった。
点だった攻撃の手数を増やし、面攻撃へと変化させた。
観音像の掌全てが拳を握り、叩き潰す。
Ｓ．Ｏ．Ｆの表面が剥がれ落ちる。
地に落ちた表面は一度だけ大きく燃えると消えていった。

観音像の攻撃が弱まることは無い。
それどころか手数が徐々に増える。
Ｓ．Ｏ．Ｆの表面は再生と破壊を繰り返し、グズグズと燻っている。

絶え間無い攻撃が続くもＳ．Ｏ．Ｆは全てを防いでいた。
進展の無い攻防が続く中、観音像に動きが見えた。
足を組み、それぞれの掌を９の形に変化させている。
那由多が呟く。

『九十九乃掌』

それだけで展開が激変した。
拮抗していた破壊と再生のバランスが崩れた。
S．O．Fの体が削られ、みるみる内に縮む。
須臾がその場から離れた直後、観音像の掌はS．O．Fを貫通し、
強力な圧力が地面に巨大な穴を開けた。

那由多の攻撃を防いでる間、須臾は絶えず『固有時制御』を最高速で行っていた。

『固有時制御』とは自らの時間流を加速・減速させることで通常よりも遥かに高い運動能力や思考速度を得ることができ、副作用である時間の修正は転生時の恩恵で無いに等しい。

そんな能力を使っていても防戦一方だった。
限界まで知覚時間を圧縮しようとも、動作時間を加速しようとも、

那由多の動作を止める事は出来ず、それどころか回避で精一杯だった。
それでも須臾は自分だけに関心を向けているのだ、と恍惚とした表情を時折見せていた。

那由多は動きを見切っていた。
しかし、観音像が出現するタイムラグにより回避のみに集中した須臾は紙一重で全ての掌から逃れる。
またも変わらず繰り返される攻防により戦況は膠着し、千日手と成っていた。

須臾は那由多の攻撃を見切る為に回避し続ける。
瞬動、虚空瞬動も併用して距離をとる。
所謂、『何にでも反応出来る位置』だ。
近すぎず、然れど遠すぎず。
観音像の掌に捕まらず、S．O．Fを活かす事の出来る射程内。

流れるような連撃は、観音像が持つ動きの一つ一つを組み合わせた動作に過ぎない。
組み合わせを解き明かし、一つの動作として見抜くことが須臾の目的であり、だからこそ回避に集中していた。

須臾の纏う喪服はボロ布のように所々が裂け、千切れている。
那由多はかすり傷と小さな火傷。

轟音とともに地が砕け、無数に穴が開く。
業火が空を焼く。

この勝敗は相手の動きを詰める事で決まる。
那由多は先を、須臾は動きを。

観音像の掌が須臾の着ている喪服を裂く。
S．O．Fの業火は掌に消し飛ばされるが那由多の頬を火の粉が撫でる。

攻撃が当たるようになった。
読みが完全に成るまであと数瞬。
相手を読み切り、自分が読み切られる迄に残されたのは数合の攻防のみ。
。

動きが変わる。
示し合わせたように。
最後なのだと、互いに理解していた。

那由多の一撃をS．O．Fが逸らした刹那、須臾の背後に観音像が出現した。
掌を広げ、逃げ場を無くす。

『零の掌』

千手観音像が血の涙を滴らせ、慈愛の掌で須臾を優しく包み込む。
輝くほどに膨大なエネルギーが口に集まっていた。

「予想通りですよ、那由多　双子ならではの感激ですね」

『甲縛式O．S「黒雛」』

黒い白鳥のように変化したＳ．Ｏ．Ｆ纏う。
灼熱が地を溶かす。
須臾が笑っていた。
発情したかのように頬を赤らめ、瞳を潤ませて、幸せそうに、静かに。

観音像が咆哮した。
那由多の持つ渾身の力を光弾として放つ。
迎え撃つように鈍い黒が、禍々しい炎が、燃える。
光と闇が激突した。

眩い光の中で動く。
最後の一手を詰めるために。
一方は練り、一方は構える。
須臾は衛宮切嗣と同じ魔術礼装であるトンプソン・コンテンダーか

ら起源弾を撃つ。
起源は切断と結合。
起源弾の効果は切り離した部位を繋ぐ事。
継ぎ目を作り、壊す。

凶弾が迫る。

「感謝を」

那由多が呟き、流れるように合掌した。

『咸卦法』

気と魔力を融合する究極技法。
美しい、と須臾は思う。

世界が時の流れを緩めたかのように、弾がゆっくりと進む。
そんな錯覚を持つほどに那由多の動きは速かった。

「『咸卦法』とは参りましたね、不覚です」

弾丸が那由多の右肩を貫き、正拳突きが須臾の胸に刺さった。

倒れ伏す那由多。
笑う須臾。

「咆哮の後に咸卦法を使うなんて無理があったようですね」
まだまだ浅い、と呟き那由多の腕を引き抜く。
溢れ出る血を見もせずに那由多を蹴り飛ばす。

「なんという虚無感　満たされないものですね」
トンプソン・コンテンダーを向けた先で目にした。
観音像が再び顕現しているのを。

「まだ意識が……いや、あれは」

観音像の表面が腐り落ちる。
肉が所々溶けて、骨が剥き出しになる。
べちょり、と粘土の高い音がした。
顔が腐り、下から新たな顔が現れた。

腐敗した肉と、剥き出しの骨が構成している、顔のような何か。
目と思われる窪みから朧朧たる闇が見える。
地獄から聞こえてきそうな怨讐が響く。

障気の塊を彷彿とさせる姿だった。

「力に支配されましたか　面倒……な！！」
口らしき部分に光が収束したのを見て伏せた。
一瞬の後。
火の海が拡がり、破滅が迫る。
遥か遠くに煉獄の線を引き、暴虐の音を轟かせた。

柚希と神に感謝して心を鎮めていた。
須臾への憎悪、神への不敬、柚希への悲哀。
全てを飲み込んで。
抑え込んでいた感謝を那由多は無意識に手放していた。
全てを解放した。

膨れた憎悪が須臾を握り潰す。
不快な音を立てて、赤黒い液体を滴らせて。
「ここまで、ですか　機会があったらまた会いましょう　……もう
那由多には興味はありませんが、ね」

腐りきった拳で潰す。
憎悪のままに。
何度も。
何度も。
何度も。
何度も。
何度も。

肉の塊と化した須臾を見て、腐敗した巨人が空に吼えた。

気づいた那由多は無意識に柚希の名を呼び、涙を流した。
思い出したのは最後の約束。
疲れきった身体に鞭を打って立ち上がる。

右肩に穴が開き、右腕が動かなくなっていた。
全身に赤黒い何かが付着していた。
考える事すら億劫になっていた。

それでもエヴァンジェリンの元へと向かう。
それが約束だったから。
血みどろの姿で、憔悴しきった表情のまま。

「僕はオリ主なんだ……エヴァンジェリンを……」

『束縛する中指の鎖』

何処からか飛来した鎖が那由多を巻き上げた。
力が抜けていく。
那由多は輝くような金髪をした金と銀のオッドアイの男が空から現れるのを見た。
彼の右手から巻きついている鎖が伸びていた。

あなたがしねば、まんぞく（後書き）

今回のまとめ

・那由多の世界超え感謝パンチ
・須臾はミサイルすら無効にする黒雛を展開
・ハイパーインフレ、まさにオサレバトル化

遅れた言い訳

・忙しかった
・戦闘の描写が苦手
・オサレバトルになってしまうのを回避するために書き直したが結局無理だった

次回も

また見てオリ主

『転生して出会ったのは味方と敵』（前書き）

このページは雨音　須臾の【カタログ】です。

雨音　須臾の死亡が確認されました。

雨音　須臾の能力から抹消されました。

条件に則り、能力【投影】が雨音　那由多に譲渡されました。

このページは雨音　那由多の【カタログ】のページになりました。

『転生して出会ったのは味方と敵』

ＳＩＤＥ：五月雨　凍夜

学校の下校中にトラックに轢かれたと思ったら俺は列に並んでいた。
待っていると列が進む。
目の前の人が終わったら次は俺だ。

『貴様は他の魂と混ざる事になる』

「……俺は転生するんだろ？」

『転生は無い　貴様の罪だといっただろうが　身の程を知れ、カレハユズキ』

目の前では薄い人と白い人のようなモノが会話していた。
すぐに薄い人は光に包まれて消えた。
そして順番が来た。

『ふむ……貴様、ちょうどいいな　たった今、枠が空いた』

「何が？」

『ネギまの世界に行かせてやるということだ』

ネギまは俺の大好きな漫画だ。

「転生するぞ！！」

『廻り合わせが良かったな　原作前で好きな能力、容姿で行ける』

「本当か！！」

『勿論、魔力と気、身体能力は原作の最強クラスの１０倍だ　最高位に位置する者の空きだからな』

「それなら金髪で右目が金、左目が銀、顔はぬらりひょんの孫に出てくる夜のリクオにしてくれ　真祖の吸血鬼で、能力はハンターハンターの念だ　念能力と漫画の発を全て使えるようにしてくれ」

『それだけでいいのか　キメラアントは固有の能力かわからないが付けてやる』

「頼む　あとはギルガメッシュの王の財宝も使えるようにしろ　才能を最高にしてくれ　魔法も武術も完璧に覚えられるだろ　人を殺して悩むのも長い時間を生きて狂うのも嫌だから精神を強くしてくれ　何があっても大丈夫なように　これでいい」

『そうか　送るぞ』

「ああ」

光に包まれたと思ったら森の中にいた。

「力が溢れてくるぜ」

木を殴ると粉々になった。

「こうやるのか」

剣を何もない場所から取り出す。

投影もしてみる。

とりあえず原作まで修行して過ごすぜ。

そして数日後のことだ。

「殺せ！！」

「魔女を殺せ！！」

ちっ、気に入らない。
関わりたく無かったが行くしかないようだ。

声の聞こえた方向に走ると町が見えた。
人々が群がり広場に集まっている。
小さな少女を磔にしていた。

「ちっ」

俺は舌打ちすると広場へと歩きだした。
見ていられないからだ。

「おい、おまえ」

人に声をかけられたが無視だ。

「今助けてやる」

俺はそう言ってから剣を宙から射出した。
少女を磔にしていたものが壊れた。

「大丈夫か」

「……おまえは何者だ？」

「俺は五月雨　凍夜　おまえの味方だ」

「トーヤ……」

よく見るとこの少女はエヴァンジェリンだった。
『闇の福音（ダークエヴァンジェリン）』と呼ばれて孤独に生きる気高い少女だ。
きっと辛いはずだ。
頭を撫でて笑う。

「安心しろ」

「ふんっ／／／」

なぜか顔が赤くなった。
吸血鬼でも風邪になるのか。

「おい！！」

「なにやってるんだ！！」

「邪悪な魔女は殺せ！！」

「うるせえっ！！！！」

『っ！！？？』

イライラする。

口ばかりでエヴァを焼こうとしやがって。

殺気を込めて睨むと怯んだのか人々が黙る。

口を開こうとすると森から赤い光が飛んできた。

「ビームだと！！」

エヴァを抱いて避ける。

「……おい／／／」

「わりいな、咄嗟だからつい」

「ふんっ／／／」

お姫様抱っこしているとエヴァが怒っていた。

謝ってすぐにおろす。

「ちっ」

町は崩れ、焼けている。

広場にいる人々は吹き飛んでいた。

「次がきたらまずい！！」

原因を潰さなきゃいけないみたいだな。

「君は此処にいろ」

「なんだと？」

「大丈夫だ」

「なぜそう言える」

「君の味方だからさ」

「待ってるからな／／／」

エヴァを置いて走り出す。

正義の魔法使いがエヴァを倒すために魔法を使ったと思う。

「別に他の人がどうなろうと構わねえ」

空を飛ぶ。

森は木が邪魔だからだ。

「正義に洗脳されたバカが許せねえだけだからな！！」

びゅおぉぉぉ！！！と音が出るくらいに速く飛ぶ。

ビームを見たから多分こっちにいると思う。

人影が見えた。

あれが魔法使いか。

上まで来るとそいつの声が聞こえた。
銀髪で血だらけだ。

「僕はオリ主なんだ……エヴァンジェリンを……」

怒りで頭の中が真っ白になった。
オリ主だから町に攻撃をしたのか？
血だらけなところを見ると好き勝手やってるみたいだ。
オリ主だからって人を簡単に殺すなんて！！

気づく前に拘束する！！

『束縛する中指の鎖（チェーンジェイル）』

相手を鎖でぐるぐる巻きにする。
この能力は相手を強制的に絶のような状態にする。
絶とは普通の人間が使えないエネルギーのようなものを無くす事だ。

「悪いがおまえはもう動けない」

「……」

銀髪が睨んでいるが無視する。

『律する小指の鎖（ジャッジメントチェーン）』

これは相手の心臓に鎖を巻き付ける技だ。
俺が決めたルールを守らなければ鎖が心臓を潰す。

「エヴァンジェリンに近寄ったら死ぬ、だ」

ルールを伝える。

「誰だか知らないけど勝手なことを……」

「な！？　ウボォーギンを動けなくした鎖を！？」

鎖がミシミシと言っている。

まずい。

「逃げられないようにするしか無い……！！」

腹を刺す。

流れる血を見ながら思う。

傷を負っていればこんな事はしないはずだ。

「オリ主を言い訳に力任せか……無様だぜ」

腹から血を流しながら倒れた銀髪を見て言う。

ゆずきとか呟いていた。

誰かの名前だろうか。

「本当に、無様」

声が後ろから聞こえた。

振り向くと倒れている銀髪にそっくりの黒髪が立っていた。

「おまえがゆずきか？」

「私が？　兄様を騙るわけないでしょう」

「兄様とは誰だ？」
「兄様は兄様ですよ　おつむが足りないようですね　失望しました」
「言わせておけば！！」
「貴方が勝手に聞いただけでしょう？」
やれやれ、と黒髪が肩を揺らす。
「それで、それをどうするんですか」
「この銀髪か　まあ、殺すかもしれないな　生きていても良くなさそうだ」
「そうですか」
頷いた。
「私としては興味が無くなったのでどうでもよいのですが」
「『オリ主の原典（ワールドイズマイン）』『ハオ』と『切嗣』の頁は燃えましたか　お気に入りでした　残念です」
黒髪の手には小さな白い本。
本から焦げた紙がパラパラと舞う。
「私を一度殺した那由多を貴方みたいな三下に殺されるのは我慢なりません」

「何……？」

「消えてください　そのほうが悦ばしいので」

『竜王の殺息（ドラゴンブレス）』

光の柱が伸びる。

「くそ！！」

『４次元マンション（ハイドアンドシーク）』に隠れる。
この能力は念でマンションを造り出す能力だ。
逃げるのは悔しいが侮れないからな。
呼吸を止めている間は存在が気付かれなくなる『神の不在証明（パーフェクトプラン）』で
エヴァンジェリンのところへ戻ろうとした。

「逃げますか　構いません、見逃してあげましょう　……さて、兄様は来世と言っていましたし此処に戻ってくるでしょう　それまで退屈ですね」

（気付かれているのか……！？）

走ってその場を離れた。

「追手が来るかもしれないから逃げるぞ」

「トーヤ……私は……」

「安心しろ　俺も吸血鬼だ」

そしてエヴァを持ち上げて走り去る。

勿論お姫様抱っこだ。

「次は負けないぜ……」

悔しさをバネに強くなる事を誓った。

『転生して出会ったのは味方と敵』（後書き）

今回のまとめ

・エヴァのフラグ獲得
・ライバル【須臾】の出現フラグ
・那由多の不幸フラグ

新規情報

・他オリ主のルート開設
・オサレシステム搭載
・歳を重ねたオリ主ほど強くなる法則

言い訳

・リアルが忙しい
・エロゲが忙しい
・黒髪が大好き

NG集03（前書き）

オリ主の原点（ワールドイズマイン）

雨音　須臾の能力。
白い本の形をしており、ページを選択することによって発動する。

オリ主が使う事のできるキャラクターを選択することで能力を使える。
キャラクターごとに選択しなければならない。
欠点としては須臾自信の能力が成長しない。

身体能力は選択したキャラクターに依存する。
選択したキャラクターの中で最も高い身体能力が須臾本人に適応される。

死亡することで使用していたキャラクターのページが燃え、二度と使えなくなる。

本が燃える、または全てのページが燃えることで雨音　須臾は二度と蘇らない。

NG集03

目が覚めるとボロボロのレイラがいた。

「アル、起きた？」

「ん、ああ……レイラ、大丈夫か？」

「……まずは自分の体を心配しなさい」

月の石の力をかなり割いて俺の精神を操作していたらしい。
ゾフィスを殺そうかしらん。

「その前にデモルトよ」

ボロボロになった現代の魔物とパートナー。
強化型デモルトがうるせえ。
ミグロンでデモルトの腕についている固そうな何かを砕く。

「ミベルナ・マ・ミグロン！！！」

「……殺しちゃダメよ」

「なあに、心配すんな　手足が千切れる程度だ」

現代組に足止めできるか聞かれた。
余裕過ぎて寝ながらでも構わん。
レイラに怒られるからしないけど。

三日月を俺の周囲に集める。

「そぉい！！」

片っ端から投げつけるだけの簡単なお仕事。
デモルトが吹っ飛ぼうがよろめこうが投げつける。
ザグルゼムというのが当たる。

「攻撃（ファイア）」

ぶつかったら三日月を爆発させる。

「回転（ロール）」

変化球も自由自在。

「連結（コネクト）」

三日月からビームっぽい何かが出る。

「収穫（ハーベスト）」

ビームを束ねて動きを阻害。
ザグルゼムにデモルトの頭がぶつかるようにする。

「攻撃（ファイア）　感謝パンチ」

何か叫びながら攻撃してきたので三日月爆破で跪かせた。
レイラをバカにしていたので感謝パンチをおまけしておく。
首の後ろの固い殻に防がれて、殻を砕くだけだった。

現代組が適当にやってデモルトは帰っていった。
パートナーの半ハゲがムカついたので髪をちぎりとった。

負けて捕まったらしいゾフィスにミグロン祭り。
心の力が無くなったら瓶詰めの月の石のカケラ。

現代組が止めに来たが無視していると体が重くなった。
アイアン・グラビレイは微妙だが、バベルガ・グラビドンは重い。
仕方ないのでやめる。

「私の本を燃や……」

「レイラと旅に出るから　またな」

レイラが帰ろうとしていたが無視して担ぐ。

「アル、離しなさい！！！」

「照れるなって」

レイラは現代の戦いには関係ないし、連れて行くことにする。
襲われたら知らんがな。

「帰るのは千年分遊んでからな」

「アル、あなた……」

「まあ、何かあったら現代組を助けるのも構わないがな」

現代組がふぁうどんとかいう巨大な建造物に行くらしい。
呼ばれたので行く途中、ごーごー言っているカブトムシに襲われた。
ミグロンで勝ったがやたら強いのが現れてヤバい。
ミグロンがバ・スプリフォとかいうのに簡単に消される。

「ふぁうどんの所には行けそうにないな」

「違うわ、アル　ふぁうんどよ」

苦戦するもなんとか撃退した。

「槍っぽいラディスいてぇ　レイラが当たるとヤバいな」

「魔物がダメで人間が大丈夫とか意味がわからないわ」

「……少しはできるようだね（服が消えただけとか人間か？）」

ナゾナゾ博士にふぁうーどという名前だと教えてもらった。

それが動き出したので止めに行くとか。

「ミベルナ・シン・ミグロン」

「……ちょっと大きすぎるわね」

バベルガ・グラビドンで転んだふぁうーどを転ばせて、起き上がろうとしたらまた転ばせる。

ナゾナゾ博士ぱねぇ。

中の魔物や人間が凄い事になってそうだ。

現代組が頑張って魔界に還したとか。

すげぇ。

ＮＧ集０３（後書き）

ボツの理由

・特になし
・なんとなく続きを書いてみた
・ガッシュ編のＮＧ最終回

くるったみち、ぼくはあるく（前書き）

白い。

俺も、世界も。

白い。

俺が白。

白が全。

全が俺。

何もかも、白。

※白の世界

くるったみち、ぼくはあるく

――――。
千を超え、万を超え、億を超え、兆を超える。
無限に感じる。
カタログが浮いている。

――――い。
知っているモノ、知らないモノ。
――痛い。
　が使っていたモノ。
―が痛い。
どうしてココにあるんだろう。
頭が痛い。
ずっと見てたから知っている。

頭が、痛いんだ。
これは、柚希のモノだ。

「ああ……」

声が漏れた。
圧迫されているように痛む頭部、焼けるように痛む腹部。
醒めた意識の中で痛みに堪えていた。

溢れるほどに満ちた情報が頭を圧迫し、意識が朦朧とする。
知らない男に刺された傷から流れる血が体力を奪っていく。

「助けてよ……」

働かない頭が繰り返し考えるのは柚希の事ばかり。
助けてと咄嗟に口から出て、求めるように視線がさ迷い、思い出す。
彼が死んだ事に。

「あぁ……あぁ……」

言葉が出てこない。
思考がねばつくように鈍り、考えられない。

わからない。
足りない。
寂しい。

生きる必要。

柚希との約束。

約束が全て。

頭を圧迫していた情報が整理され、幾分か落ち着いた。
思考は未だに正常とは言い切れないが、問題は無いはずだ。

身体を動かそうとするが気だるい感じがする。
それに寒い。

血が未だに流れているのだ。
あの男が刺した傷が深い。
傷が開いたまま。

このままなら血液が足りなくなって死ぬかもしれない。
死んだら約束が果たせない。
約束は守る。

死ぬのは構わない。
けれど死んだ場合、約束を破ることになる。
それはダメだ。

カタログを開く。
回らない頭で探す。
柚希を何度も呼ぶ思考。
何とかしなければとノロノロと回転する思考。
カタログ検索が上手く機能しない。

血が止まらない。

そうだ、焼けばいい。

柚希だって料理を焼いていた。

約束のためだ。

投影しようとすると脳が沸騰したかのように痛む。

「……っ！！！！　ふぅ……ふぅ」

焼きごてで傷口を焼く。

醜悪な臭い。

痛かった。

約束を破るほうがずっと痛い。

我慢した。

呼吸する度に漏れる声くらいはきっと柚希も許してくれる。

疲れたから少しだけ眠ることにする。

自分の血に浸りながら。

痛いままだけど、今は寝たかった。

起きたらきっとオリ主になるように頑張るから、今は眠るよ。

「ごめんね、ゆずき」

…

……

……

……

……

……

……

……

……
……
……
……
……
……

柚希が笑っている。
遠い、何処か。

『那由多、チャーハン食うか　腹が減っただろ』

「柚希？」

『那由多、あんまり無理はするなよ』

「柚希！？」

『那由多、応援してる」

「柚希！！」

叫ぶ自分の声で起きた。

目の前に柚希はいない。
視界には薄暗くなった空があるだけ。
固まった血がぐずぐずと付着している。

腹に走る激痛に顔を歪めながら上半身を起こす。
空腹を感じた。
頭が痛みを訴えているが無視してカタログを検索する。
大好きなチャーハンを探す。
柚希は材料ごと投影していたのを思い出す。
自分は作ることが出来ないから料理そのものを投影する。

皿に乗った普通のチャーハン。
熱いのだろう、湯気が出ているが構わずに手掴みで食べる。

「おいしくないよ……　まずいよ……」

大好きなチャーハンが、まずく感じる。
吐きそうになるのを堪えて飲み込む。

「うぐっ……おえっ……　なんでだよ……」

とても食べられたモノじゃない。

なんで自分はこんなモノが好きなんだろう。

この世界で初めて食べたときは美味しかったじゃないか。

それから何時も美味しかったじゃないか。

柚希に頼めば何時だって美味しかった。

柚希が作ったから美味しかった。

いない。

だからまずい。

「……」

柚希がいたから大好きだった。

その柚希がいない。

チャーハンを投げ捨てる。

見たくなかった。

大好きな柚希はもう作ってくれないのだから。

くるったみち、ぼくはあるく（後書き）

今回のまとめ

・約束を盲信する那由多
・精神が少し病んでいる
・最低系オリ主の誕生

次回も
また見てオリ主

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0030o/

歩くご都合主義

2010年10月22日15時19分発行